

井尻B遺跡5

—第6次調査報告—

福岡市埋蔵文化財報告書 第529集



1997

福岡市教育委員会

井尻 B 遺跡 5 Jiri

—第6次調査報告—

福岡市埋蔵文化財報告書 第529集



遺跡番号 IZB6
調査番号 9501

1997

福岡市教育委員会

序

古くから大陸との文化交流の玄関口として栄えた福岡市には、多くの文化財が分布しています。本市では文化財の保護、活用に努めていますが、各種の開発事業によってやむを得ず失われる文化財については、記録保存のための発掘調査を行っています。

本書はそうした遺跡のひとつで、南区井尻B遺跡内の共同住宅建設に先だって行った発掘調査の成果報告書です。

発掘調査の結果弥生時代から奈良時代にわたる遺構、遺物が見つかりました。とくに弥生時代の青銅の鏡、鎌を製作する鋳型が出土し、注目を集めました。この地域にも奴国を構成する重要な拠点となるムラがあったことが証明されたと言えるでしょう。

発掘調査から整理、報告にいたるまでご理解とご協力をいただいた白水敬子様を始めとする多くの関係者の方々に対し、心からの感謝をいたしますと共に、本書が文化財に対する認識と理解、更には学術研究に役立てば幸いに思います。

平成9年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 町田 英俊

例　　言

1. 本書は共同住宅建設に先だって、福岡市教育委員会が1995年4月3日～5月29日にかけて行なった井尻B遺跡第6次調査の報告書である。井尻B遺跡としては5冊目の報告書である。
2. 検出した遺構については、調査時には遺構を示す記号Mを付して検出順に通し番号を付した。本章では、この番号からMを除き、遺構の性格を示す用語を付して、住居跡1、溝2のように記述する。
3. 本書で使用する方位は磁北である。
4. 本書で使用した遺構実測図は吉武学、宮井善朗の他、西村智道(現大刀洗町教育委員会)、藤川繁昌、吹春憲治が作成した。製図は宮井の他林由紀子の協力を得た。
5. 本書で使用した遺物の実測図は宮井の他西村智道、井上蘭子が作成した。また製図は宮井の他林由紀子の協力を得た。
6. 本書使用の写真は吉武、宮井が撮影したものである。
7. 遺物実測図の括弧内の番号は収蔵時の登録番号である。遺構図中の遺物出土状況図の番号はこちらに一致し、遺物実測図中の枝番号ではない。注意されたい。
8. 本調査に関わる記録、遺物類は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵、管理されるので、活用されたい。
9. 本書の執筆は宮井が行い、編集は吉武、宮井両者協議の上宮井が行なった。

本文目次

I.はじめに	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査体制	1
II. 井戸B遺跡周辺の地理的、歴史的環境	3
III. 調査の記録	6
(1) 概要	6
(2) 住居跡	8
(3) 井戸、土壤	24
(4) 溝	33
(5) 据立柱建物	33
(6) その他の出土遺物	35
IV. 小結	37

挿図目次

Fig. 1 井戸B遺跡周辺の遺跡 (1:25000)	2
Fig. 2 調査地点と周辺の既調査地点 (現在 1:4000)	4
Fig. 3 調査地点と周辺の既調査地点 (昭和初年 1:4000)	4
Fig. 4 調査区位置図 (1:600)	6
Fig. 5 調査区遺構配置図 (1:200)	7
Fig. 6 住居跡1、3、4実測図 (1:60)	9
Fig. 7 住居跡1出土土器実測図1 (1:4)	10
Fig. 8 住居跡1出土土器実測図2 (1:4)	11
Fig. 9 住居跡6、7、9実測図 (1:60)	13
Fig. 10 住居跡3、6、7、8、9出土土器実測図 (1:4)	14
Fig. 11 住居跡8、11実測図	16
Fig. 12 住居跡11出土土器実測図1 (1:4)	17
Fig. 13 住居跡11出土土器実測図2 (1:4)	18
Fig. 14 住居跡20、21、22実測図 (1:60)	19
Fig. 15 住居跡21、22出土土器実測図 (1:4)	20
Fig. 16 住居跡24実測図 (1:60)	21
Fig. 17 住居跡24出土土器実測図 (1:4、1:3)	21
Fig. 18 住居跡25、26、27実測図 (1:60)	22
Fig. 19 住居跡25、26出土土器実測図 (1:4)	23
Fig. 20 井戸13、土壤10、16実測図 (1:40、1:20)	25
Fig. 21 井戸13出土土器実測図 (1:4)	26

Fig. 22	土壤10出土遺物実測図 (1:4、1:2)	28
Fig. 23	土壤16出土遺物実測図 (1:4、1:2)	29
Fig. 24	土壤2、12、29、30実測図 (1:40、1:200)	31
Fig. 25	溝14、31実測図 (1:100、1:40)	32
Fig. 26	溝14、31出土土器実測図 (1:3、1:4)	32
Fig. 27	掘立柱建物実測図 (1:80)	34
Fig. 28	その他の遺構出土土器実測図 (1:4)	35
Fig. 29	各遺構出土石、鉄製品、玉類 (1:2、1:1)	36
Fig. 30	井戸B遺跡3次調査住居跡配置図 (1:200)	39

図 版 目 次

- PL. 1 (1) 出土鋳型1 (20001-B面、20002-表)
 (2) 出土鋳型2 (20001-A面、20002-裏)
- PL. 2 (1) 調査区北半部全景 (南から)
 (2) 土壌10 (北から)
- PL. 3 (1) 調査区北半部全景 (南から)
 (2) 調査区南半部全景 (北から)
- PL. 4 (1) 住居跡1 (西から)
 (2) 住居跡3、4 (西から)
- PL. 5 (1) 遺構5 (南から)
 (2) 住居跡6、7 (南から)
- PL. 6 (1) 住居跡8 (南から)
 (2) 住居跡11 (西から)
- PL. 7 (1) 住居跡20 (東から)
 (2) 住居跡21 (東から)
- PL. 8 (1) 住居跡22、23、溝31 (北から)
 (2) 住居跡20~23 (北から)
- PL. 9 (1) 住居跡24 (北から)
 (2) 住居跡25~27 (北から)
- PL. 10 (1) 井戸13 (西から)
 (2) 土壌10鋳型出土状況 (西から)
- PL. 11 (1) 土壌16 (西から)
 (2) 掘立柱建物1 (南から)
- PL. 12 (1) 掘立柱建物2 (西から)
 (2) 出土鋳型

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

1995年1月9日付で、白水敬子氏より、共同住宅の建設予定地内における埋蔵文化財の有無についての事前審査願いが出された。申請地は福岡市の周知の遺跡である井尻B遺跡内に位置しており、またかつて調査が行われ、5世紀代の古墳などが検出された2次調査、5次調査地点に隣接していることから、埋蔵文化財課では審査願いを受けて95年1月25日に試掘調査を行なった。その結果申請地内には造構が良好な状態で検出された。この成果をもとに協議を行ない、工事によってやむを得ず破壊される部分については発掘調査を行ない、記録保存を図ることとなつた。発掘調査は、白水氏との委託契約により、福岡市教育委員会埋蔵文化財課がこれを行なうこととなつた。調査は1995年4月3日に着手し、5月29日に終了した。

2. 調査体制

調査主体 福岡市教育委員会 教育長 尾花剛（前）、町田英俊（現）

調査総括 埋蔵文化財課 課長 荒巻輝勝 第2係長 山口謙治

調査庶務 埋蔵文化財課第1係 西田結香

調査担当 埋蔵文化財課第2係 吉武学、宮井善朗

調査補助 西村智道（現大刀洗町教育委員会）

調査作業 秋山豊 金沢春雄 金子國雄 熊本義徳 渋谷博之 高崎秀巳 高田勘四郎 高田歎 西田昭 二宮白人 萩尾行雄 藤田圭三 松原高博 森垣隆視 森本勇夫 米倉國弘 野村道夫 太田正顥 田原房五郎 榎林司朗 吉田米男 吹春憲治 藤川繁昌 江下和彦 金子澄子 辛島栄子 境フジ子 酒井康恵 杉村百合子 森田祐子 古賀典子 持丸玲子 森園弘子 平田浩美

整理作業 西村智道 井上蘭子（九州大学、現福岡市教育委員会） 大石加代子 林由紀子 太田順子 武田祐子

また調査時の条件整備等に関して白水氏に多くのご配慮を賜った。また調査中には西南学院大学高倉洋彩教授、福岡市教育委員会後藤直部長、山崎純男課長をはじめ、多くの方々のご教示を得た。記して感謝申し上げるとともに、本報告に十分生かせていないことをお詫びする次第である。

遺跡調査番号	9501	遺跡略号	IZB-6
調査地地番	福岡市南区井尻1丁目170-1外		
開発面積	1194.2m ²	調査対象面積	700m ²
調査期間	1995年4月3日～5月29日	分布地図番号	25-0090



1. 井尻B遺跡
2. 奈所遺跡
3. 丘上川遺跡
4. 東都原遺跡
5. 諸岡A遺跡
6. 諸岡B遺跡
7. 板付遺跡
8. 高畠遺跡
9. 下月隈C遺跡
10. 井尻A遺跡
11. 稲原遺跡
12. 三筑遺跡
13. 寺島遺跡
14. 横手遺跡
15. 曰佐遺跡
16. 弥永原遺跡
17. 巴佐原遺跡
18. 麦野A遺跡
19. 麦野B遺跡
20. 南八幡遺跡
21. 神御原遺跡
22. 須玖遺跡群
23. 間本遺跡群
24. 大綱K遺跡
25. 三宅K遺跡
26. 三宅寺
27. 三宅B遺跡
28. 三宅C遺跡
29. 野多日A遺跡
30. 野多日C遺跡

Fig. 1 井尻B遺跡周辺の遺跡 (1:25000)

II. 井尻B遺跡周辺の地理的、歴史的環境

井尻B遺跡は福岡平野のほぼ中央部に位置する。福岡平野には那珂川、御笠川の二本の川が貫流する。両河川の間には須玖丘陵とそれから北側に派生して来る台地群が北側へ伸びている。台地内には、小規模な谷が多く入り込み複雑な地形をなしている。この台地上や、沖積地内の微高地に掛けて各時代の遺跡が残っている。井尻B遺跡は須玖丘陵が北に伸びつつ標高を下げ、やや低平な台地となる境界付近に立地する。遺構検出面である地山は鳥栖ロームであるが、比恵遺跡、那珂遺跡などで見られるものほど粘土化していない。

まず井尻遺跡群内における既往の調査について簡単に触れておく。1次調査は、南区井尻1丁目111-1外において行われた。溝状遺構や、水溜状遺構、土壙などが検出されているが、葉落の縁辺に近い位置と考えられる。包含層からは瓦も出土している。格子、斜格子叩きの平瓦と模骨痕の残る丸瓦である。2次調査は井尻5丁目175-1において行われた。今回調査区の東側に隣接する位置にある。豊富な遺構、遺物が出土している。主な遺構は弥生時代後期の竪穴式住居、石塗土壙墓、溝など、古墳時代では井尻B1号墳と名付けられた古墳の周溝が検出され、溝内から多量の埴輪片と共に初期須恵器が出土している。また古代の竪穴式住居も検出されている。この他新期ロームから多量の旧石器が見つかっており、細石刃文化期のものを主とし、ナイフ形石器文化期のものを数点含むという。3次調査は井尻1丁目293-1、2外に位置し、1次調査区の西側に隣接するが、この調査地点は台地の上である。弥生時代中期の住居跡1基、井戸1基、弥生時代後期から古墳時代初めにかけての住居跡17基、井戸2基等が検出されている。古代遺構も注目され、住居跡3基の他、瓦を多量に包含する溝が検出されている。瓦は1次調査と同じく、格子、斜格子叩きの平瓦と模骨痕の残る丸瓦で、百済系の單弁の軒丸瓦、平行線文の軒平瓦が出土している。調査区近辺は古記録にも瓦類の出土が見えており、寺院などの存在を窺わせている。筆者は報告書において仮称井尻廃寺としておおよその寺域を想定復元している（註1）。4次調査は井尻1丁目747-1で行われ、弥生時代後期の竪穴式住居跡などが検出されている。5次調査は2次調査地点と今回調査地点の中間に位置する。井尻B1号墳の2次調査の延長の周溝が検出されている。また1997年2月には、3次調査地点の北東方の井尻団地内で、7次調査が行われ、谷部、ないしは旧河川に堆積した包含層が検出され、旧地形復元の資料を提供している。また包含層から相当量の弥生中期土器が出土しており、中期集落の存在を示唆している。

つぎに今回調査で主に見られた弥生時代について周辺の遺跡を概観しておこう。該期については井尻B遺跡から南東へ約1kmの地点にある須玖遺跡群を抜きにしては語れない。須玖遺跡群は弥生時代の奴国を中心地である。須玖丘陵の先端付近からその前面に広がる沖積地にかけて奴国王墓であるD地点、墳丘墓をはじめとする壇塚墓群、青銅器やガラスの工房跡等が見つかっている。これらについては既に多くの研究で触れられており、近年では春日市による概説もあるので（註2）くわしくは触れないが、今回調査地点との関りで重要なのは、須玖丘陵周辺の沖積地に展開する工房群である。青銅器工房である永田遺跡、坂本遺跡、黒田遺跡、ガラス工房である五反田遺跡などは井尻B遺跡から指呼の間にある。また井尻B遺跡から南西へほぼ等距離には、弥永原遺跡があり、ガラス勾玉鋳型、小形彷彿鏡が出土している。その東側には墓域である日佐原遺跡があり、後漢鏡の副葬がある。

この他の台地上の遺跡としては比恵遺跡、那珂遺跡などが重要である。いずれも弥生時代全期間にわたって営まれる拠点集落である。それぞれの遺跡からも青銅器鋳型が出土しており、取瓶、中子等の鋳造用具も出土している。それぞれの拠点集落内で、鋳造、祭祀が行われていたことを推測させる。

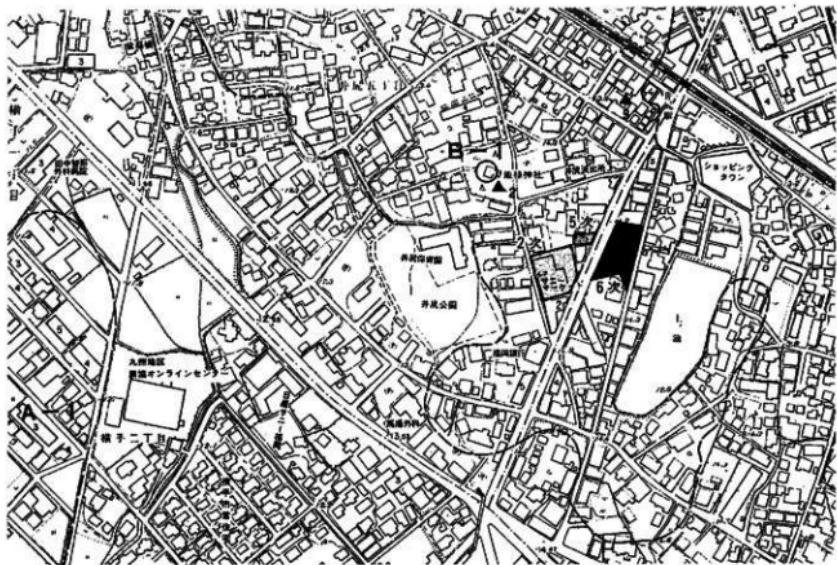


Fig. 2 調査地点と周辺の既調査地点（現在 1:4000）



Fig. 3 調査地点と周辺の既調査地点（昭和初年 1:4000）

また沖積地内の微高地に喰る集落として雀居遺跡が挙げられる。弥生時代後期の大集落で、環溝を巡らせ、大形の掘立柱建物を含む掘立柱建物群からなる。多量の木製品にも注目される。このような沖積地内の集落は最近の試掘調査などで新たに見つかるものが多く、この他にも後漢鏡が出土した東郡河遺跡などもある。今後も注意が必要である。

このような、とくに青銅器鋳造から井尻B遺跡の位置をみると、二通りの解釈が可能である。一つめは、須玖遺跡群と同様な奴国中枢部の直轄工房的な性格を有するとするものである。地理的な近さから言えば十分に成り立つ考え方であろう。もう一つは比恵遺跡群、那珂遺跡群等と同様に、奴国を構成する拠点集落の一つと考え、その中で自律的な青銅器生産が行われていたとするものである。今の所井尻B遺跡内では、須玖遺跡群で見られるような体系的な工房跡は見つかっておらず、造構のあり方や、鋳型の出土状況などは比恵遺跡、那珂遺跡等に類似しており、こちらの解釈にも説得力がある。井尻B遺跡群がどちらの性格を持つものか、あるいは両方を兼ねた性格を持つのか、その解決については、須玖遺跡群との地形的な親縁性などにも留意しつつ、今後の調査成果に期待したい。

(註1) 福岡市教育委員会「井尻B遺跡2」福岡市埋蔵文化財報告書第411集 1995

(註2) 春日市教育委員会「須玖岡本遺跡」吉川弘文館 1994



Ph. 見学会風景

III. 調査の記録

(1) 概要

今回の調査で検出した遺構は、弥生時代後期末～古墳時代初頭の竪穴住居跡17基（この中には疑問のあるものも含む）、弥生時代中期の井戸1基、青銅器鋳型が出土した土壙2基、古代の溝、時期不明の落とし穴状の長方形土壙4基、掘立柱建物2棟等である。井戸B1号墳の周溝の延長は検出されなかった。調査過程を以下に略述する。

4月3日に表土剥ぎを開始し、4日に機材を搬入した。廃土は場内処理のため、北側から着手した。4月12日にはほぼ遺構を検出し、掘り下げにかかる。同時に平板測量、国土座標、レベル移動を行う。4月19日に遺構の掘り下げをほぼ終え、20日に全景写真撮影を行う。終了後実測を開始し、28日に補足的な調査をして、北半部を終了。連休に入る。連休あけの5月7日から南側の表土剥ぎを開始した。11日より遺構検出を行って、北半部と同様に掘り下げ、写真撮影、実測と調査を進め、5月22日には吉武が次の現場に入るため、一足先に現場を離れたが、5月29日にはすべての調査を終了し、機材を撤収した。

調査中、4月13日には土壙から小形彷彿鏡、銅鏡等の鋳型が出土した。これについては、国内に未だ類例が少なく、また共伴土器を伴い、時期の判明する貴重な例として、報道関係への発表を行った。その結果は5月23日付の各紙に掲載されている。また福岡市教育委員会の広報誌である「福岡の教育」148号（1995年8月発行）にも掲載されている。

この他、福岡市役所新規採用職員の研修の一環としての職場実習の受け入れや、校区である宮竹小学

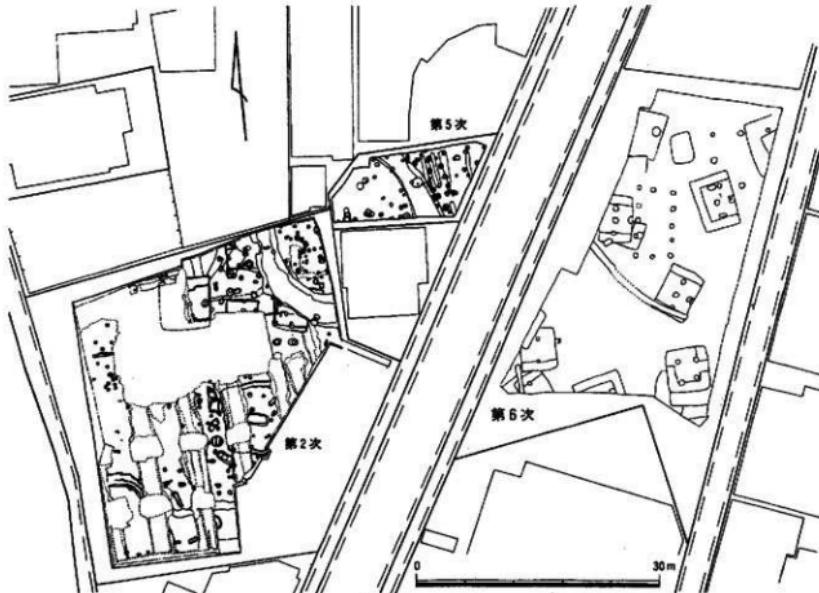


Fig. 4 調査区位置図 (1:600)

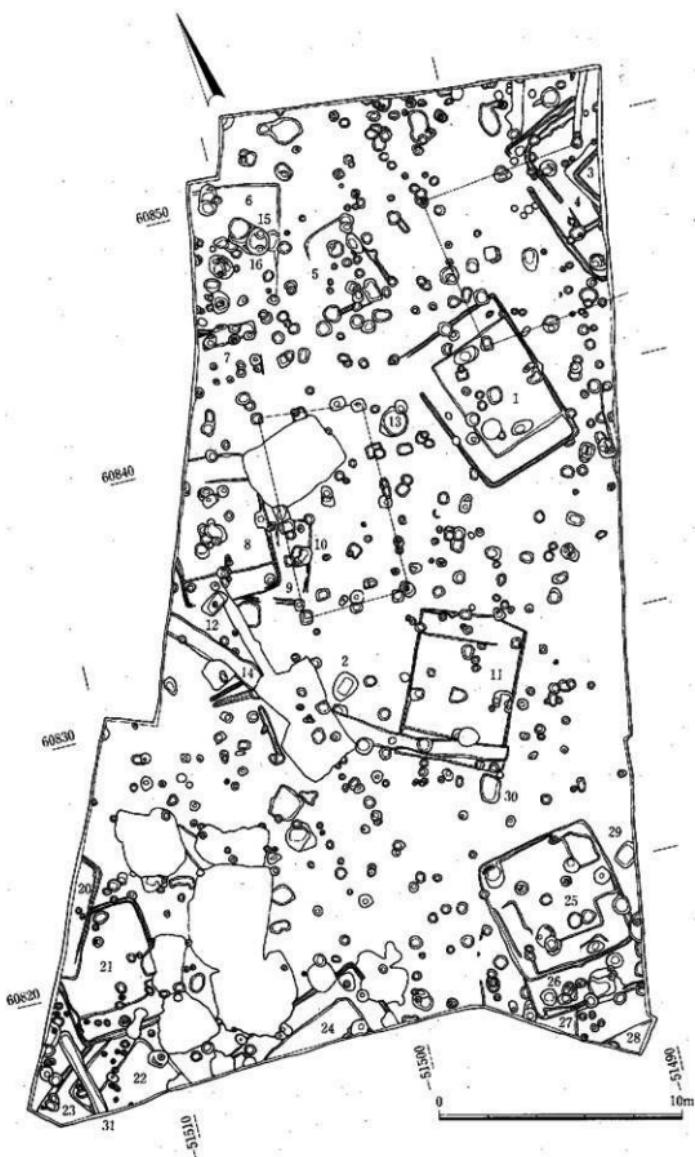


Fig. 5 調査区遺構配置図 (1:200)

校の生徒による現場見学など、文化財の理解を深めるのに役立つような行事も合わせて行った。

(2) 住居跡

竪穴住居跡は、疑問もあるものも含めて、17基検出した。ただし、遺存は総じて良くなく、ほとんど壁溝のみで判別できるものもある。

住居跡1 (Fig. 6)

調査区中央やや北よりで検出した。長方形を呈する住居跡である。長軸を南北方向に向ける。長辺6.7m、短辺4.5mほどを測る。東側に入口と考えられる壁際土壙(土壙101)、中軸に2個の主柱穴(ピット103、111)、中央に炉跡(土壙336)を持つ。入口側を除く三辺にベッド状の高床部(以下ベッド状遺構と呼ぶ)を設ける。ベッド状遺構の幅は1mほどである。検出時でのベッド状遺構の高さは床面から10cmほどである。張り床は検出されなかった。壁際土壙101は蹄形を呈し、深さ10~20cmを測る。主柱穴は深さ50cmを測る。壁溝はベッド状遺構の外壁に沿って巡り、またベッドのない入口側にも巡るが、ベッド下側の床面周囲には巡らない。

出土土器 (Fig. 7、8)

1は球形の胴部を持つ甕である。口縁端部は坦面をなす。外面は縱方向のハケメで、下半部に削りを施す。内面はナデ。2の甕は短く屈曲する口縁部を持つ。端部は丸く納める。外面は粗いハケメの後、削りに近いナデを施す。内面も目の粗いハケメである。3の甕は口縁があまり開かない。内外面ハケメである。4は丸底を呈する焼胴部である。外面ハケメ、内底部には指頭痕が見られる。5は口縁部がすばまる小形の壺である。端部は坦面をなす。内外面ともハケメを施す。6は壺胴部下半部の破片であろう。最大径からかなり下がった位置に刻目を持つ突帯を巡らせる。7は平底の底部である。小形の甕と考えられる。8、9は接合しないが、同一個体かもしれない。複合口縁壺である。屈曲部には稜がたち、直行して立ち上がる。口縁端部は坦面をなす。器面の荒れが著しく、調整は不明である。10~13は在地系の高环脚である。10は裾が緩やかに広がり、対向する2ヶ所に穿孔する。外面はハケメを施す。11~13も同様な脚部である。14は外来系の小形高环の坏部である。やや内済しながら開く坏部を持つ。器面荒れのため調整は不明。15は外来系の器台脚部であろう。直線的に開く。調整は内外面ともナデのようである。16是在地系の器台の脚部側と考えられる。端部は坦面をなす。外面ハケメ、内面に絞り痕が見られる。17も在地系の器台の脚部で、外面は叩きを施す。18、19は小形の椀である。20は主柱穴であるピット103からの出土である。わずかに上底を呈する平底で、内面に連続するヨコハケを施す。外面はナデと思われる。外来系の甕であろう。21は壁際土壙である101出土の小形高环脚である。ごく短い脚柱部を持ち、裾部は大きく広がる。孔はない。

Fig. 8は住居跡1の主柱穴であるピット111出土の土器を掲げた。22是在地系の高环坏部である。中位で緩やかに屈曲するが、段や稜は明確でない。口縁端部は坦面をなす。外面ハケメ、内面はナデか。23は高环脚部。端部は丸く納める。内面にハケメが見られる。24是在地系の器台である。厚手で、端部は坦面をなす。25は広口壺である。口縁端部は丸く納める。肩が張り、胴部内外面ともハケメを施す。口縁部は内外面ともヨコナデである。これらの土器群の示す時期であるが、球形胴の甕、14、20、21のような外来系土器の存在、22の高环の特徴などから、古墳時代初頭併行期に置くことができよう。

住居跡3、4 (Fig. 6)

調査区北東端で検出した。調査当初は、最も外側の壁溝で示される遺構を住居跡4、その内側の壁溝の内側を住居跡3のベッド状遺構部分。最も内側の調査区端の落ち込みを住居跡3の床面部分と考えたが、住居跡3とした壁溝と、その内側の落ち込みの壁とは平行せず、別遺構となる可能性が高いと考えられる。從ってこの個所には、建変えまたは切り合いで、3基の住居がある可能性が高い。遺

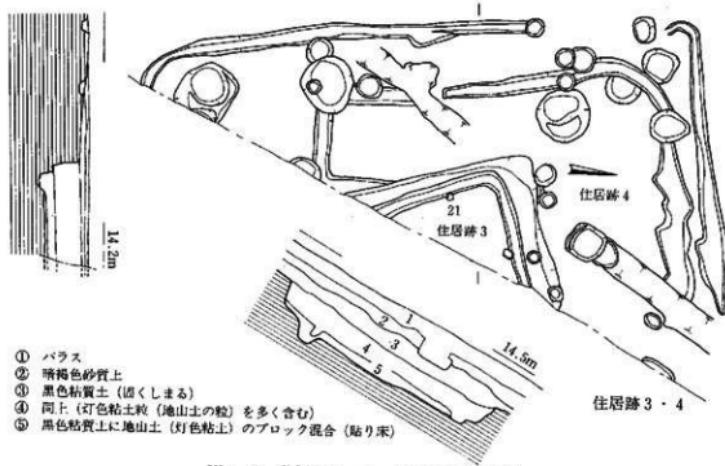
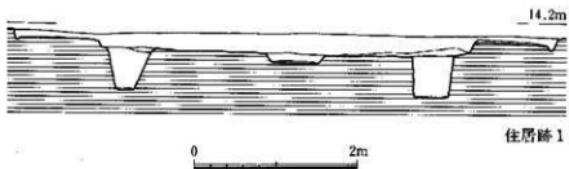
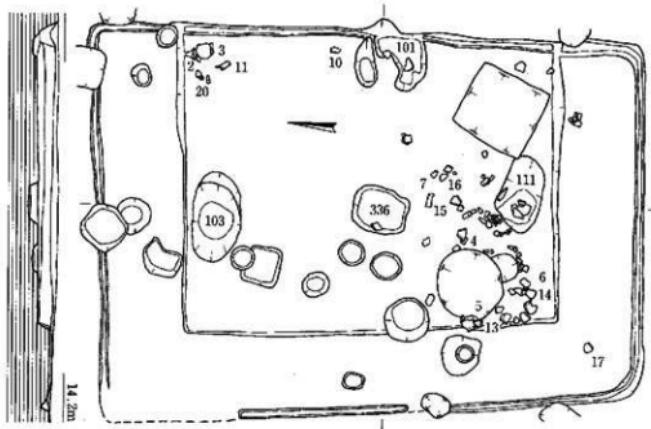


Fig. 6 住居跡 1、3、4 実測図 (1:60)

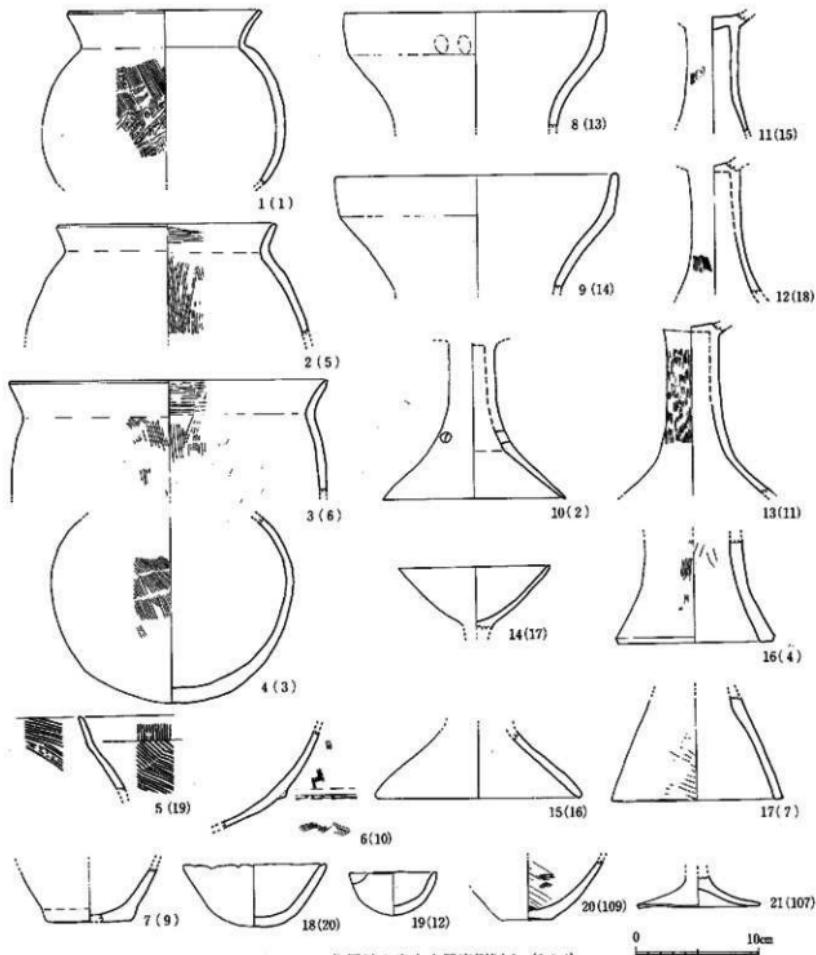


Fig. 7 住居跡 1 出上土器実測図 I (1:4)

物取上げに際しては最も内側の落ちこみ部分の遺物を住居跡3、その外側を一括して住居跡4としている。ここでは住居跡4外壁溝、内壁溝、住居跡3と呼ぶことにする。住居跡4外壁溝は 6.8×3.6 m のL字形を呈する。深さは10cmに満たないので、これ以外は削平されたのであろう。長軸を南北方向に向ける。内壁溝は南北4.3m、東西4m以上を測る。南端部には幅1mほどの所から、深さ5cmほどの段落ちがあって、ベッド状を呈する。住居跡4とした範囲内には、主柱穴や、炉跡、壁際土壤等他の住居関連の遺構は見られない。住居跡3は2.3m以上×2.1m以上を測る。深さは40cmを測る。壁際

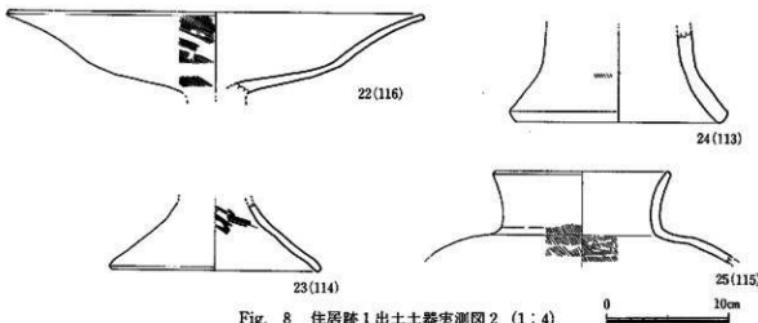


Fig. 8 住居跡1出土土器実測図2 (1:4)

のやや内側に壁と平行に溝を切っている。

出土土器 (Fig.10)

住居跡4の範囲内からは図化に耐える遺物はない。図示したのは住居跡3の範囲から出土したものである。1は甕である。短く屈曲して開く口縁部を持ち、胴が張る。口縁端部は坦面をなす。外面はハケメ、内面も横方向のハケメと考えられる。2の甕は口縁端部を薄く尖らせる。胴部内面に削りを施す。3は手づくね土器である。器體の厚い皿型を呈する。少ない資料であるが、古墳時代初頭に置くことができよう

遺構5 (Fig. 5)

住居跡とは考えにくい遺構であるが、ここで報告する。遺構5は住居跡1の北側に位置する。短辺2.4m、長辺3.8mほどを測る長方形の浅い遺構である。遺構中央から東側にかけて、厚さ3から5cmほどの焼土が部分的に堆積していた。また床や、壁の一部も焼いている。中軸に沿って深さ20cmほどビットが2基あるが、伴うかどうかは不明である。確証はないが、鑄造関連遺構の可能性も否定できないので、報告しておく。図化に耐える遺物はないが、覆土、焼土中より、弥生土器片が少量出土している。

住居跡6 (Fig. 9)

住居跡6とした遺構も住居としては疑問もある。調査区の北西端で検出した。住居跡7に切られる小溝を、住居跡6の南壁溝として復元している。主軸を南北方向に向ける。長辺5.7m、短辺3.6m以上を測る。南壁溝とした小溝以外は壁溝は検出されていない。ベッド状遺構も検出されない。主柱穴も特定できないが、深さ50~60cmを測るビット161、341などが候補となろうか。床面で検出された土壤16は、伴うかどうかは確証はないが、出土遺物からは時期差は認められない。これに切られる土壤15を入口土壤とすれば、土壤16より古いといえよう。土壤16、15については後述する。

出土土器 (Fig.10)

4、5とも器台である。4はやや小形で、外面にユビオサエによる凹凸が多い。5は外面にハケメを施した後ナデ消しているようである。6は小形の甕の口縁部。端部は丸く納める。

住居跡7 (Fig. 9)

住居跡6の南側で検出した。住居跡6と同様、住居としては疑問である。南側は削平されてプランは不明である。東西2.4m以上、南北2.1m以上を測る。北壁際はベッド状ではなく、むしろ幅60cmほどで四んでいる。床面には遺構5と似て、焼土や、炭化材が散布している。

出土土器 (Fig.10)

7は小形丸底壺である。器壁は薄く、胎土中にも砂粒の包含がほとんどなく、精製品の部類に入ろう。外面にはミガキの痕跡は見られず、丁寧なナデによって仕上げているようである。住居跡6、7の時期は、出土遺物と切り合いを考慮して、6が弥生時代終末、7が古墳時代初頭と考えておく。

住居跡8 (Fig.11)

調査区西辺中央で検出した。住居跡9を切る。長方形を呈する住居跡である。長軸を南北方向に向ける。長辺6m、短辺4mを測る。南北の短辺側にそれぞれ幅1.1mほどのベッド状遺構を設ける。東側に壁際土壇(土壇271)をもつ。土壇271の深さは床面から15cm程を測る。中軸に沿う深さ40~50cmのピット267、272が主柱穴と考えられるが、それぞれピット268、347に切られている。炉跡は土壇350で、焼上、炭が堆積している。炉跡350も土壇352などを切っているように見られ、先の主柱穴の切り合いとあわせ、一回程度の建て替えも想定される。床面に貼り床は確認できなかったが、ベッド状遺構は部分的に土盛りによっている。壁溝は四隅に切られ、ベッド状遺構の下には切られない。

出土土器 (Fig.10)

Fig.10の8~18が住居跡8出土の上器である。8は長胴を呈する甕である。口縁は緩やかに屈曲しながら開き、内外面とも棱は立たない。端部は甘い坦面をなす。内外面ともハケメであるが、内面は一部ナデ消している。9は大形甕の頭部である。付け根に刻目を持つ突帯を巡らせる。突帯は断面方形である。内面の肩部と頭部の境には甘い棱が立つ。器面が荒れているが、内面もハケメが施されている。10は複合口縁壺である。頭部は付け根から大きく開き、屈曲部は突唇状を呈する。口縁端部は外側へつまみ出す。頭部付け根からやや胸部側へ下がった位置に、断面三角の突帯を巡らせる。器面の荒れが著しいが、調整は内外面ともハケメと考えられる。11は壺または甕の突唇部である。10の下半としても追和感はないが、やや薄手なのが疑問である。突唇は断面方形で、刻目をもつ。調整は不明である。12は口縁部を折り返す器台である。調整はナデか。13も器台で、12と同一個体かも知れない。14は椀である。器壁は薄い。内外面ともナデ仕上げのようである。15は高环脚壺部として復元したが、壊部の可能性もある。端部は坦面をなす。外面にわずかにハケメの痕跡があるが、ナデ消している。16は甕である。口径より胸部最大径がやや大きくなり、球形に近くなる。胸部は内外面ハケメである。17は主柱穴であるピット267出土の甕である。外面は口縁端部付近をヨコナデする以外はハケメ、内面はハケメをナデ消しているようである。口縁端部は丸く納める。18は同じく主柱穴であるピット272出土の大形甕口縁部である。端部は坦面をなす。器面荒れがひどいが、内外面ともハケメの痕跡が確認される。住居跡8の時期は、以上の上器群から弥生時代終末に置くことができよう。

住居跡9 (Fig.9)

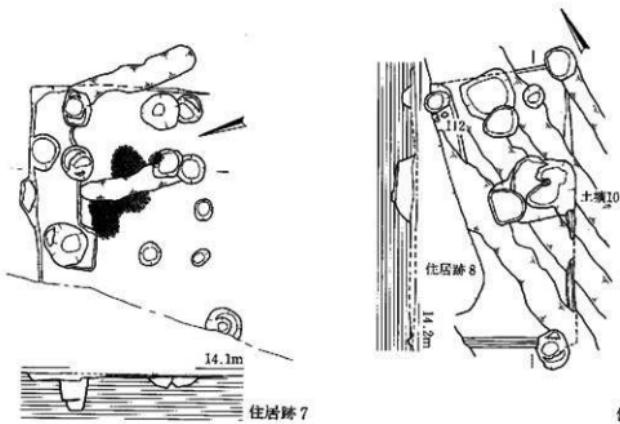
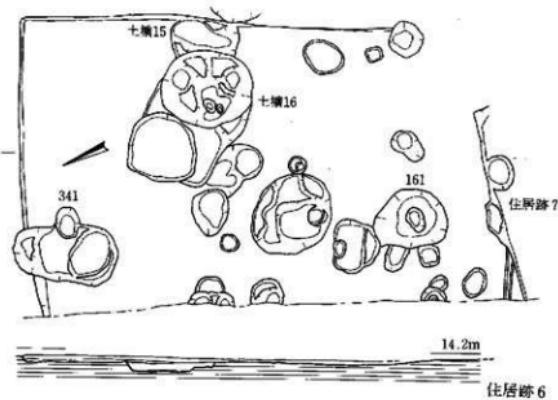
住居跡8に切られる。壁溝のみの遺存である。南北3.4m、東西1.4m以上の方形に復元される。内部には住居にかかる遺構は検出されていない。北端の住居跡8と切り合う付近に5cm程の段落ちがあり、これより東側はベッド状遺構になるかもしれない。東壁際に土壇10があるが、伴うものかどうかは不明である。土壇10については後述する。

出土土器 (Fig.10)

Fig.10の19は複合口縁壺の口縁部片である。頭部は大きく開き、屈曲部から上はわずかに内湾しつつすばまる。端部は坦面をなす。土壇10との時期差はほとんど認められない。

住居跡11 (Fig.11)

調査区中央やや南側で検出した。長方形を呈する住居跡であるが、南側を溝14に切られる。長辺6m、短辺4.5m程を測る。東側の壁際土壇319が入口と考えられる。中軸上のピット320、324が主柱穴



0 2m

Fig. 9 住居跡 6、7、9実測図 (1:60)

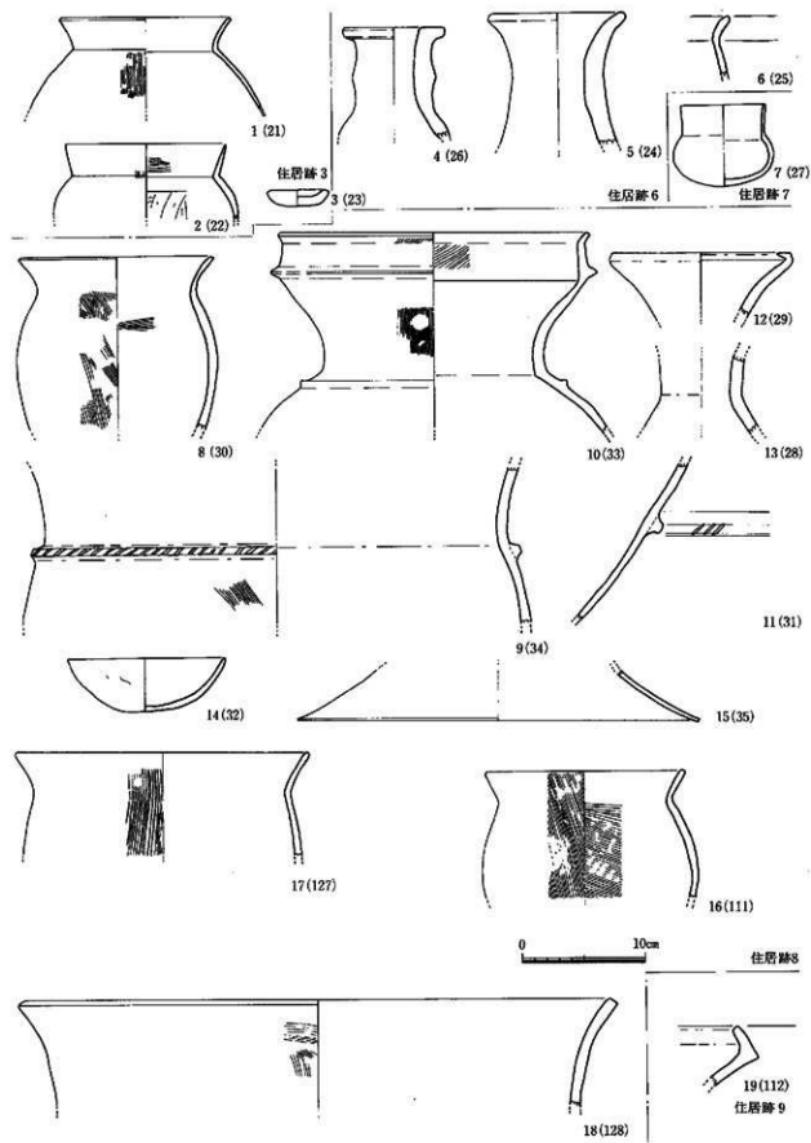


Fig. 10 住居跡3、6、7、8、9出土土器実測図 (1:4)

であろう。ただし324は現代井戸で大半が破壊されている。ピット320の深さは35cmを測る。中央の土壌323が炉跡と考えられ、半截した甕が出土している。底面からは若干浮いているが、据えられたものへの可能性が高い。南北の両短辺側にベッド状遺構を設ける。ベッドの幅は1.1m程を測る。ベッド状遺構は北側では床との境から30cmほどを畔状に削りだし、この畔と壁との間を充填して作り出している。床面は5~10cmの厚さの貼り床が見られた。

出土土器 (Fig.12, 13)

1は大形甕である。口縁端部は坦面をなし、付け根に断面三角の突帯を巡らせる。口縁部外面はハケメで、その他はナデ調整される。2は中形の甕であるが、器壁が極めて薄い。しかし削りなどは見られず、内外面ともハケメのようである。3は小形の甕。口縁はあまり開かず、内外面ともナデ調整である。4は大形甕の底部である。胴部との境はあいまいであるが、底部は平底である。内外面ともハケメを施す。5は短く屈曲する口縁部を持つ。端部は坦面を意識しているようである。小形の甕であろう。6も小形の甕である。口縁端部は丸く納める。器壁がかなり荒れているが、内外面ともナデ調整のようである。7は小片で器形に幾間があるが、いずれにせよ小形の甕もしくは鉢である。表面はほとんど磨滅して、調整不明である。8は鉢である。器壁が比較的薄い。口縁は緩やかに外方へ開き、端部は薄く尖らせる。底部は丸底である。内外面ともナデによる仕上である。9は大形甕の胴部下半の突帯部分である。突帯には刻目を施し、内外面ともハケメを施す。10は小形丸底甕である。器壁が厚く、また胎土にも砂粒が多い。外面はハケメを雄にナデ消している。11は椀である。器壁は厚く、また胎土に砂粒も多いが、ナデは丁寧で、比較的精製である。口縁端部は丸く納める。内面に縦方向の工具痕が見られる。12も椀である。口縁端部は丸く納める。器面の荒れが著しいが、外面にハケメ様の条線が微かに観察できる。13はやや深い小形の椀である。内外面ともハケメのようである。14も小形の椀である。器形は半球形ではなく、底部と体部の区別を意識したような作りである。15は尖り底を呈する。手づくねと思われ、歪が大きい。16の椀も、底部と体部の区別を意識したような作りになる。17は突出した平底を呈する。外面底部近くに叩きらしき痕跡があり、内面にも横方向のハケメが見られるので、畿内系の鉢と考えられる。18は円筒形を呈する土器である。いわゆるジョッキ形土器であろうか。21は器台受け部である。端部は坦面をなす。外面はハケメを施す。22は袋状口縁の器台である。外面はハケメを施す。23は高环もしくは器台の脚裾部である。脚柱部との接合部付近まで遺存している。外來系土器か。24は在地系の高环脚裾部と考えられる。端部は坦面をなし、内外面ともハケメをナデ消している。

Fig.13に掲げた土器は、中央土壌(炉跡)である土壌323から出土した土器である。25は大形甕である。口縁部は直立気味にわずかに開く。端部は広い坦面をなす。口縁部付け根に断面三角の突帯を巡らし、ハケメ原体による刻目を施す。胴部はやや肩の張る截頭倒卵形で、胴部下位に刻目を持つ突帯を巡らせる。底部は急に厚さを増し、凸レンズ状を呈する。胴部突帯より下は草茎状の工具による削りを施し、その他の部位は内外面ともハケメ調整である。26も甕底部で、丸底である。これらの土器から、住居跡11の時期は弥生時代終末に置くことができよう。

住居跡20 (Fig.14)

調査区南西端で検出した。東壁を検出したのみで、大部分は調査区外へ出る。東辺長4.7mを測る。壁溝が巡り、厚さ10cmほどの貼り床が見られる。覆土、貼り床から弥生土器片が少量出土しているが、固化に耐える破片はない。

住居跡21 (Fig.14)

住居跡20の南側で検出した。住居跡20に切られる。長方形を呈する。長辺5.4m、短辺4.3m程を測

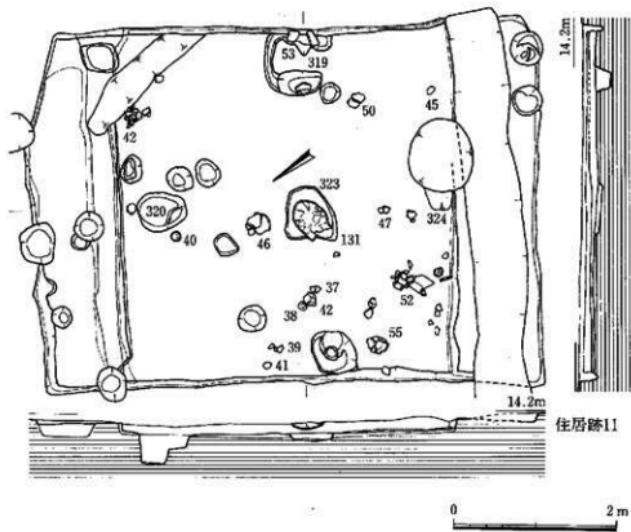
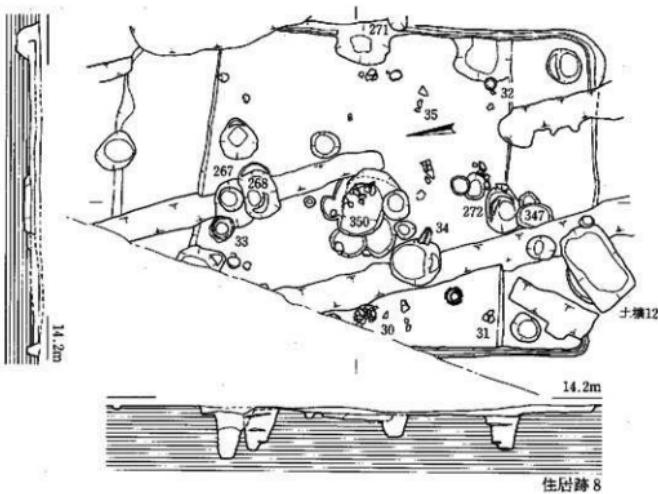


Fig. 11 住居跡 8、11実測図

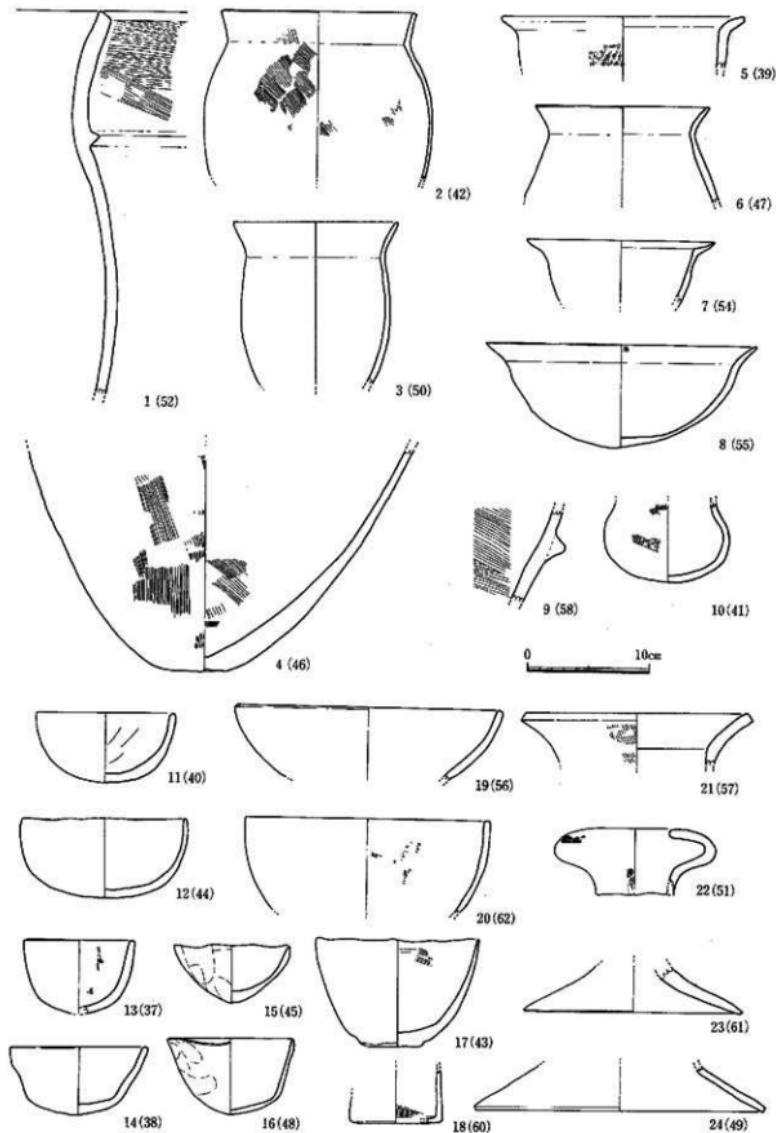


Fig. 12 住居跡11出土土器実測図 1 (1:4)

る。東側の土壙422が入口であろう。深さは20cmほどである。中軸上のピット424、425が主柱穴であろう。424は深さ50cm、425は30cmを測る。南側のみにベッド状遺構が確認された。ベッドは南辺から東側の壁際土壙422に向かってL字に取り付いている。幅は1m程である。壁溝は四周に巡り、ベッドの下にはない。貼り床も確認できなかった。

出土土器 (Fig.15)

1は小形丸底壺である。胎土には砂粒が多く、精製品ではない。口縁端部は薄く尖らせる。口縁部はヨコナデ、体部はナデ調整である。2は椀である。焼成が極めて堅緻である。口縁端部は丸く納める。外面は削りを施し、内面はハケメの後ナデ消す。最後に口縁内外面をヨコナデする。小形土器ばかりで時期比定が困難であるが、1の土器の特徴や、ベッド状遺構が壁際土壙間にまわることから、古墳時代初頭と考えておく。

住居跡22 (Fig.14)

住居跡21の南側で、住居跡21に切られる。南半分が調査区外に出る。東西辺長3.7m、南北辺長3.9m以上を測る。北側にベッド状遺構を設ける。一部盛り土で、焼土なども埋め込んでいる。幅は1mほどである。中軸上のピット483が主柱穴であろう。貼り床は見られないが、古い土壤を埋め立てた個所がある。東側の土壙476が入口になる可能性もあるが、やや北側に寄り過ぎか。

出土土器 (Fig.15)

3は広口壺もしくは複合口縁壺であろう。頸部は直立しつつ立上り、大きく開く。付け根に突帯を巡らす。胸部は肩が張る。内外面ともハケメを施す。4は盃があるため、器形に疑問がある。盃と考えられる。口縁部は緩く屈曲し、稜は立たない。器面の磨滅が著しく、調整不明。5、6は同一個体

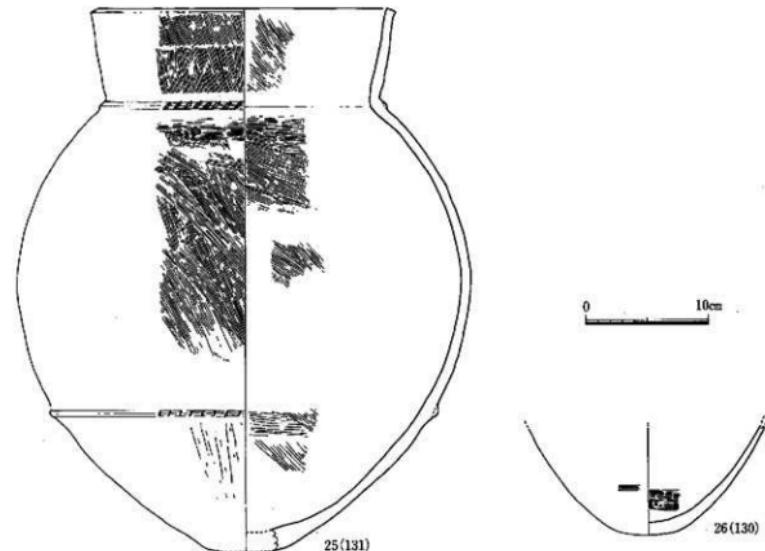


Fig. 13 住居跡11出土土器実測図2 (1:4)

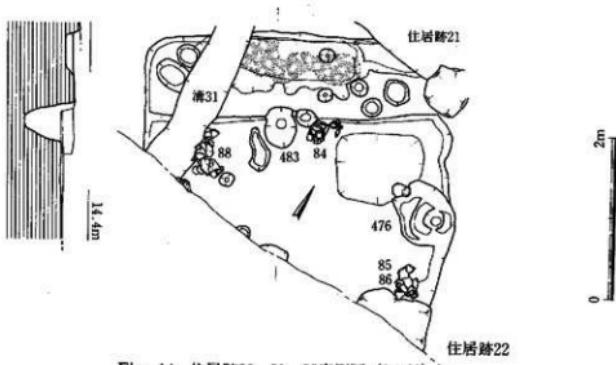
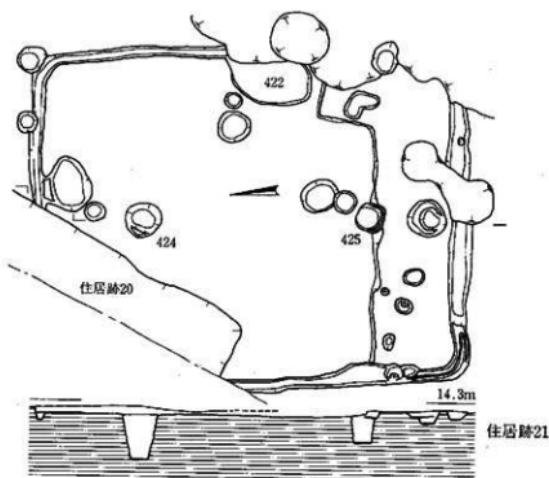
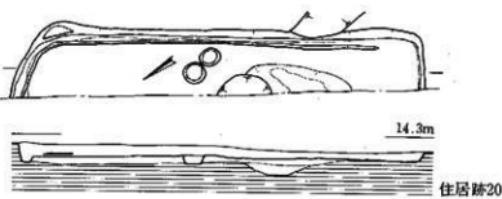


Fig. 14 住居跡20、21、22実測図 (1:60)

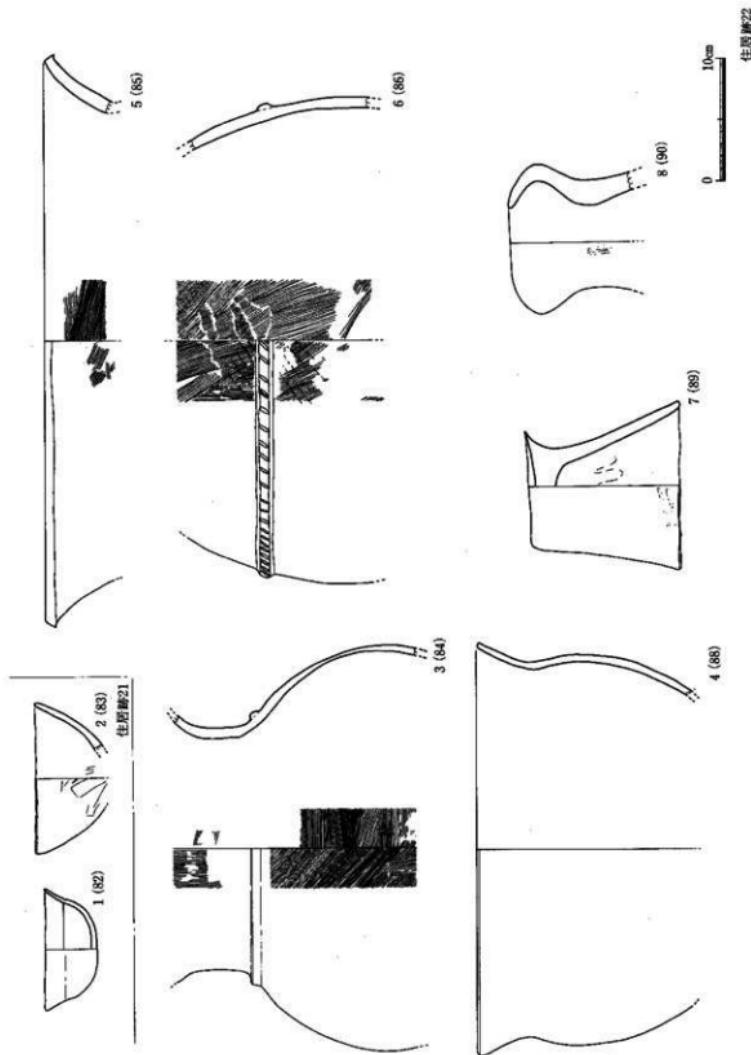


Fig. 15 住居跡21、22出土土器実測図 (1:4)

の可能性が高い。5は口縁部である。端部は坦面をなす。内外面にハケメを施す。6は胸部である。最大径のやや上位に断面方形の突帯を巡らし、刻目を施す。外面は叩きの後、ハケメにより叩き目を消す。内面はハケメ。この他に類似した色調、器厚の底部に近い部分の破片がある。7は脊形器台である。上面は若干凹み、器壁は厚い。脚端部は丸く納める。器面かなり荒れているが、外面に叩き痕らしい条線と、内面にユビオサエ痕が観察できる。8は袋状口縁を持つ器台である。口縁端部は丸く納める。器壁は極めて厚い。外面はハケメ調整のようである。これらの土器群は、3の壺がやや古式の特徴を持つものの、総体としては弥生時代後期後半から終末の幅で考えられる。

住居跡23 (Fig. 5)

調査区南西隅に位置する。住居跡21、22に切られ、北辺のみを検出した。壁溝のみが辛うじて依存している。調査区内での延長3.3mを測る。弥生土器片が少量出土しているが、図化に耐えるものはない。

住居跡24 (Fig. 16)

調査区南端中央で検出した。調査区内で唯一東西方向に長軸を向けると考えられる住居である。西壁に想定した段から更に西へ40cmほどの小溝が伸びており、これを住居に含めるかどうかで、規模が変わると、ベッド状遺構の形状、配置から見て、含めない方が妥当と考えるので、長辺5.8m、短辺3.4m以上に復元される。ピット404が主柱穴であろう。深さは50cmを測る。ベッド状遺構は北側と、東側に設けられている。東側は地山削り出し、北側は盛り土である。検出範囲内には壁際土塙は見られない。貼り床も確認できない。

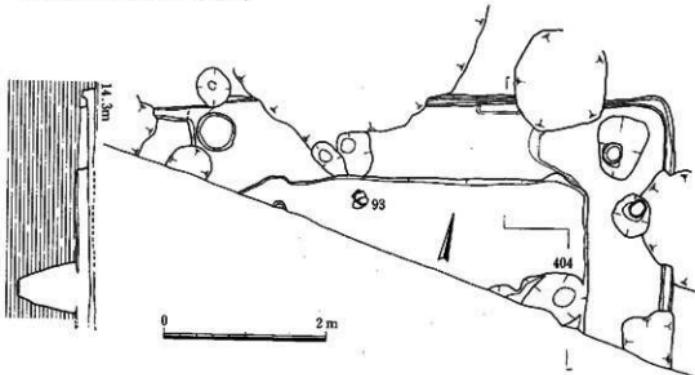


Fig. 16 住居跡24実測図 (1:60)

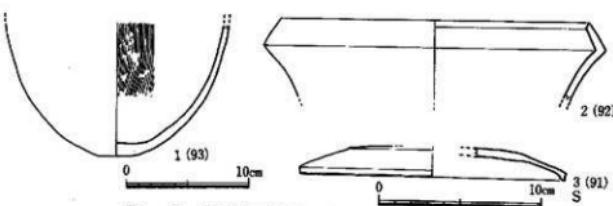
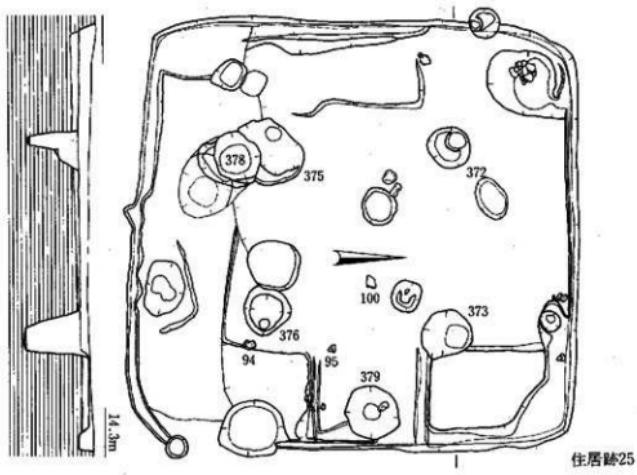


Fig. 17 住居跡24出土土器実測図 (1:4, 1:3)



0 2 m

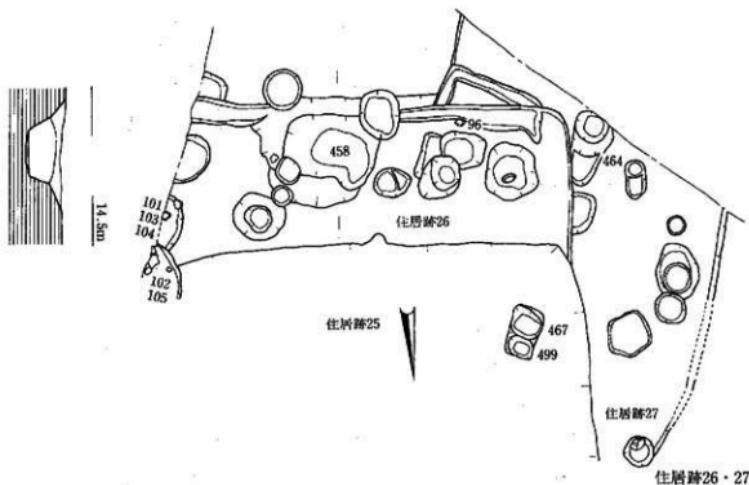


Fig. 18 住居跡25、26、27実測図 (1:60)

出土土器 (Fig.17)

1は甌底部である。内底部は平坦面を作り出し、体部との区別は比較的明瞭であるが、外底部はわずかに凸レンズ状を呈するのみで、ほとんど丸底に近い。内外面ともハケメを施す。2は複合口縁壺である。加曲部から直線的に内傾する。端部は坦面をなす。器面はかなり磨滅しているが、口縁部はヨコナデ、頸部はハケメのようである。3は混入の須恵器壺蓋である。天井部をヘラ削りする。1、2の土器で判断すれば、住居24の時期は弥生時代終末に置くことができよう。

住居跡25 (Fig.18)

調査区南東端で検出した。方形を呈する住居である。一辺5~5.4mを測る。調査区内唯一の四本柱の住居で、ピット372、373、376、378もしくは375が主柱穴になると考えられる。深さ60~70cmを測る。東側の壁際土壇379が入口であろう。深さは30cmほどを測る。ベッド状遺構は遺存が悪く、10cmに満たないが、壁際土壇379の両側には確認される。379の北側は東辺しか設けられないものと考えられるが、379の南側は、南辺を巡って、西辺の中央やや北側まで、設けられたものと考えられる。いずれも土盛りによる構築である。床面も5~10cmの貼り床がある。貼り床の下、壁際土壇379の両側に幅10

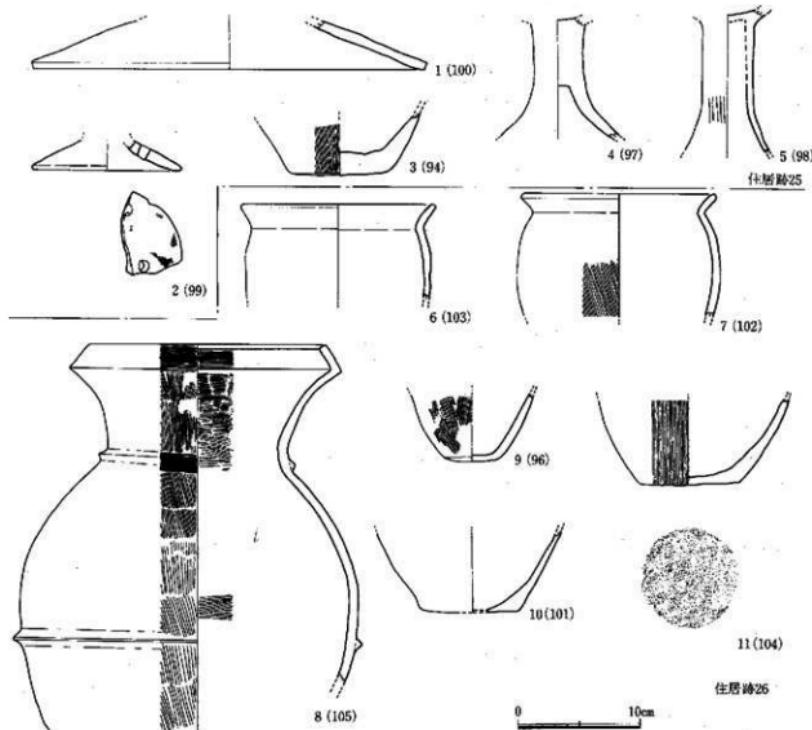


Fig. 19 住居跡25、26出土土器実測図 (1:4)

cmほどの小溝が切られており、長さがベッドの幅とほぼ一致することから、ベッド構築の設計線の役割を果たすものと考えられる。

出土土器 (Fig.19)

1は脚裾部である。内外面ともナデ調整。2は小形高环か器台の脚部である。外面から穿孔する。外面はハケメを施す。3は平底の底部。弥生時代中期末ないし後期初頭頃の甕と考えられ、混入である。4は高环脚部で、脚柱部は中実である。5は中空の脚部である。この他Fig.17の住居跡25の図中、右上隅に示した土器は、外面ハケメ、内面削りを施す布留式土器で(ほとんど胴部片ばかりで、且つ遺存が極めて悪いことから図示しえなかつた)、この住居が古墳時代初頭に属することがわかる。

住居跡26 (Fig.18)

住居跡25の南側で検出した。検出当初は住居跡25のベッド部分と考えていた遺構である。住居跡25の調査が進むにつれ、別遺構と判明した。東西長4.3m以上、南北長2m以上を測る。壁溝以外に住居に関わる遺構は確認されないが、實際の土壤458は伴うものかもしれない。

出土土器 (Fig.19)

6は小形の甕である。口縁部付け根は強いヨコナデにより、段状をなしている。7も小形甕である。口縁は短く屈曲する。胴が張り、外面にハケメを施す。内面はナデである。8は複合口縁甕である。屈曲部から内湾しながら内傾する。口縁端部は坦面をなす。頸部は付け根が最もすばまる。頸部付け根と、胴部最大径からやや下がった位置に断面三角の突帯を巡らす。胴部はやや長胴である。口縁部に至るまで全面ハケメによる調整を施すが、胴部と頸部以上では原体が異なり、胴部の方が目が粗い。その境目は、頸部付け根ではなく、1段～2段下がった個所のようである。9は凸レンズ状の底部である。10はわずかに凸レンズ状になるが、平底に近い底部である。11も平底で、ほとんど外反せずに体部へ立ち上がる。これらの土器と住居跡25の切り合いから、住居跡26の時期は弥生時代後期中頃から後に置くことができよう。鋳型の時期に最も近い住居である。

住居跡27 (Fig.18)

住居跡26、25に切られる。プランは長方形と考えられる。長5.5m、幅3.6m程であろうか。ほぼ中軸上に載るピット464、ピット467もしくは499(住居25の貼り床下で検出)が、主柱穴の可能性がある。464は深さ60cm、467は40cmを測る。東側の住居跡26に切られる付近に段落ちがあり、これから南側が、ベッド状遺構になるのかも知れない。遺物は中形のボリ袋1袋程度出土しているが、小片のみで固化に耐えない。すべて弥生土器で、後期の甕口縁部片なども含む。

造構28 (Fig.5)

調査区南東隅で検出した。直線的な壁を持つ段落ちで、住居跡25、26に平行する。住居跡である可能性が高いと考えられる。壁の延長は調査区内で2.4m、深さは5cmほどである。出土遺物は無い。

(3) 井戸、土壤

井戸は弥生時代のもの1基、土壤は性格不明の浅いものを含めると多いが、ここでは鋳型を出土した2基、落とし穴状を呈する4基について報告する。

井戸13 (Fig.20)

住居跡1の西側で検出した。やや南北に長い楕円形を呈する井戸である。長径1.2m、短径1mを測る。検出面からの深さは3.3mを測る。壁はほぼ直に立ち、円筒状を呈する。調査時にも若干の湧水があった。遺物は上位と下位で大まかに分離しているが、厳密に分層した訳ではない。

出土土器 (Fig.21)

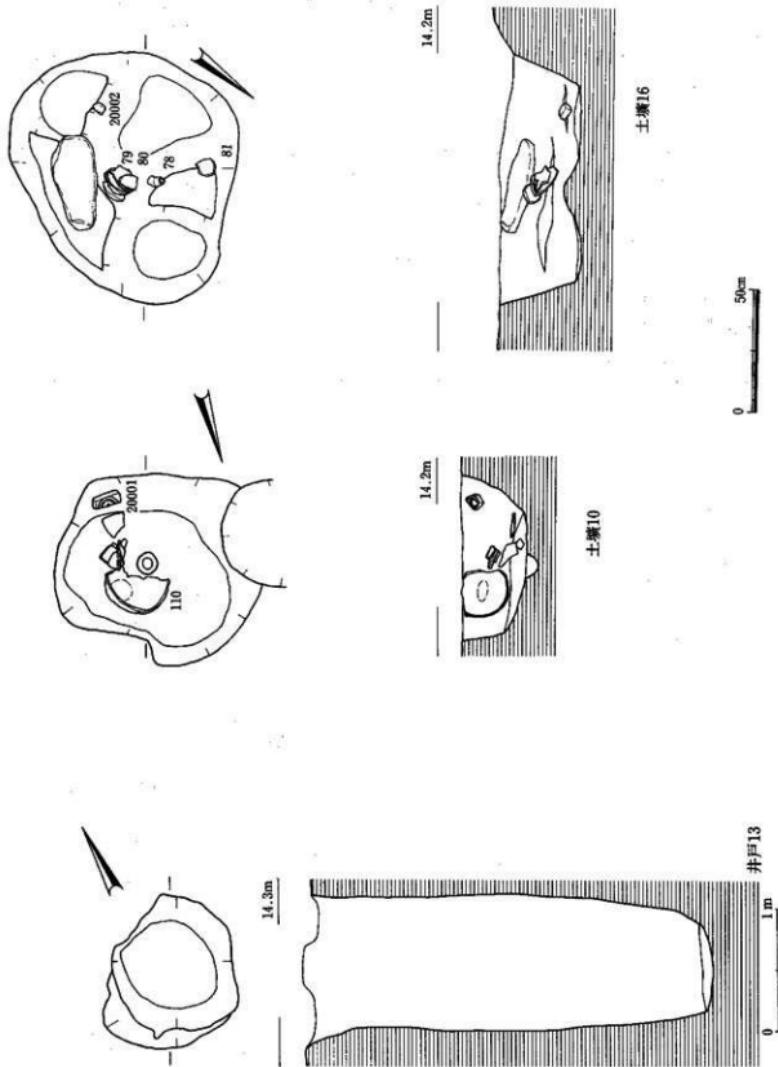


Fig. 20 井13、土壤10、16剖面图 (1:40, 1:20)

1は大形甌である。口縁部は「く」字形に屈曲する。端部は坦面よりむしろ凹み気味になる。口縁部下に断面三角の突帯を巡らせる。2も大形甌である。口縁部は内傾した鶴先状を呈する。口縁端部は坦面をなす。口縁部下に断面三角の突帯を巡らせる。3は高坏の脚柱部である。内面に絞り痕が見られる。丹塗である。4は平底の底部である。小形品であろう。5は單口縁の直口甌である。口縁端部は坦面をなす。外面と頸部内面の一部に丹塗を施す。6は無頸甌である。口縁部は折返して屈曲させる。2孔を穿孔するが、対向する部位にも穿孔していると考えられる。底部はわずかに上底気味になる。器面の磨滅が著しいが、外面ミガキ、内面ナデであろうか。この器種としては大形の部類に入るであろう。7は樽形を呈する甌である。口縁部は小振りの鶴先状を呈する。肩部最大径はほぼ中位にあり、その個所に断面三角の突帯を巡らせる。外面は全体を目の粗いハケメを施し、内面はナデ調整である。これらの土器のうち、1の甌、3の高坏、4の底部が上位出土、その他は下位の出土である。弥生時代中期末の井戸である。

土壤10 (Fig.20)

住居跡9の東壁中央で検出した。北側が一部張り出しが、本来方形を志向したプランと考えられる。長軸85cm、短軸70cmを測る。検出面からの深さは25cmほどである。壁は比較的直に立ち、床との境は

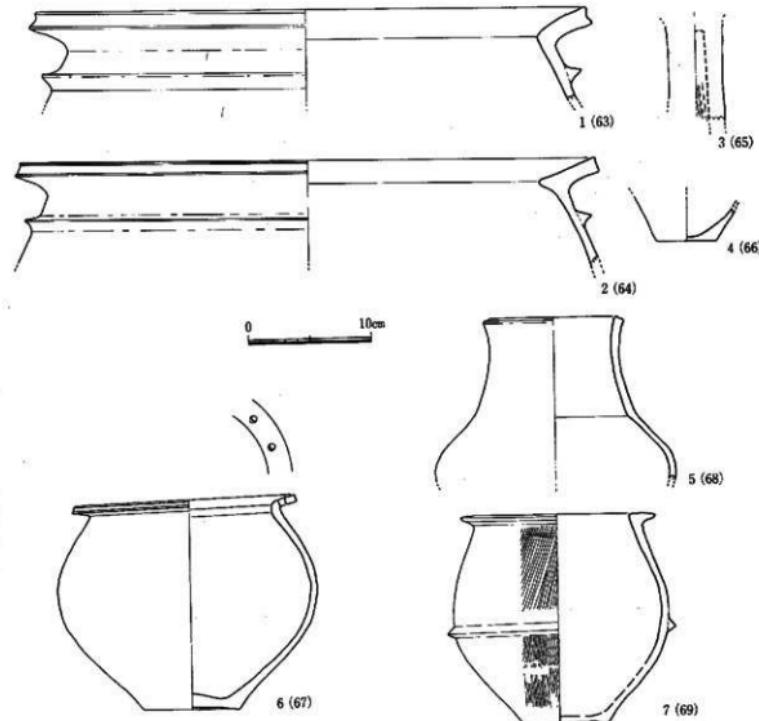


Fig. 21 井戸13出土土器実測図 (1:4)

明瞭である。土壙内からは壺形土器の底部と鏡、鉢の両面鋳型が出土している。壺は底部からは若干浮いており、鋳型も検出面に近いレベルの出土である。故意に据えたというより、投棄に近い状況と考えられる。

出土遺物 (Fig.22)

まず七器から報告する。1は壺の下半部である。複合口縁壺と考えられる。若干長脚を呈するが、突帯は胴部最大径にめぐる。突帯の断面は三角でシャープである。底部はごくわずかに凸レンズ状になるが、ほぼ平底と言ってよい。胴部への立上りも、わずかに外反気味になっている。外面はハケメ、内面はナテ調整である。内底部に緑青色に変色した白色粘土が厚さ2cmほど溜っていた。粘土内部には銅製品などは埋められていなかった。粘土そのものの分析はまだ行っていない。2は椀である。口縁端部は坦面をなす。外面ナデであるが、内面にはユビオサエによる門凸が見られる。1の壺から見て、やや長胴化していること、底部からの立上りの外反が痕跡的になっていること、凸レンズ底への移行が窺われることなどから、下大限式古段階に相当すると考えられ、弥生時代後期中頃に置くことができよう。

鋳型 出土した鋳型は1点である。鏡と鉢が掘り込まれている。今鏡の面をA面、鉢の面をB面、側面調整は鉢鋳型のために行われているので、鉢鋳型を表に置いたとき、右側に来る面をC面、左側に来る面をD面、上側に来る面をE面、下側に来る面をF面とする。出土時にはA面を上に向けていた。鋳型の大きさは長さ12.1cm、幅4.6cm、厚さ2.2cmを測る。

A面には鏡が掘り込まれているが、ほぼ2分の1を欠く。鏡の復元径は10cm程である。文様帶の構成は幅1.5cmの鏡縁部、0.5cmの櫛歯文帯、1.5cmの内区文様帯、鉢座からなる。鏡縁部は平縁で、端部に向かって若干厚くなる。櫛歯文帯の間隔もかなり不規則である。内区外端に浮き彫りの連弧文を巡らす。弧文間は3~5mmの間隔がある。鉢座との間には曲線からなる文様を施す。また鉢座にも浮き彫りの連弧文を巡らす。内区の連弧文は8弧、鉢座の連弧文は4弧に復元されよう。E面側の端部に湯口ががこっている。鉢には鉢孔を穿つ中子を支えるための凹みが見られる。鋳型面は黒変し、鋳造に用いられたことがわかる。この鋳型から鋳造された鏡は未だ類例を見ない。土器の示す時期からみて、小形彷製鏡II型の初現段階と考えられる。また、内区文様は、他の例に見られるものと大きく異なり、擬銘帯起源の文様ではない様に思われる。曲線が空間を囲い込むように巡る特徴が見られ、方格規矩四神鏡や、細線式獸帶鏡に見られるような獸形文が起源ではないかと考えられる。

B面には鉢が掘り込まれている。2個の連鉢式である。鉢側面に湯口を持つ。鉢は長さ6cm、開幅が最大幅で、2.2cmを測る。長く鋭いかえりをもち、開の端部は方形を呈する。某の付け根には矢柄を止める段を持つ。茎部も断面三角形で、中央に後線が入る。合わせ鋳型であるから断面菱形になる。上下双方とも茎部付け根の段に対応して、横方向に細線が刻まれている。下側の鉢にはかえりの付け根の位置にも刻まれており、鋳型掘り込みの際の割付け線であろう。この鋳型にそのまま該当するような形態の銅鉢は未だ見られないが、雀居遺跡5次調査出土例が比較的近い。

鋳型は、両面鋳型であるが、同時には使用されていない。A面の鏡を作った後、なんらかの事情で半裁されている。D面とF面の角に、割付線もしくはクサビ痕の溝がある。D面上位の欠損はその際のものであろう。C面側も1.5~2cmほど削っている。C面、E面、F面には合印が刻まれており、合わせ鋳型であったことがわかる。

土壤16 (Fig.20)

住居跡6の床面で検出した。不整規円形を呈する。長軸1.3m、短軸0.9mを測る。検出面からの深さは30cm程である。床面には凹凸が多い。壁は比較的直に立つ。土壤内から板石、土器片と共に銅鏡

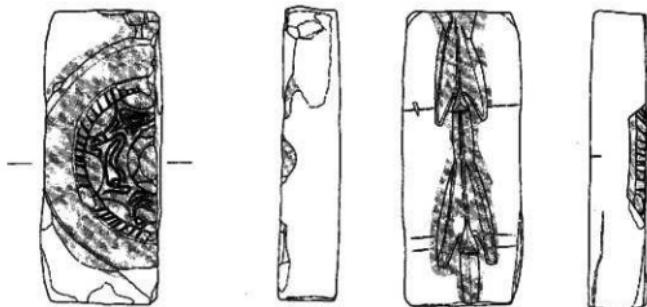
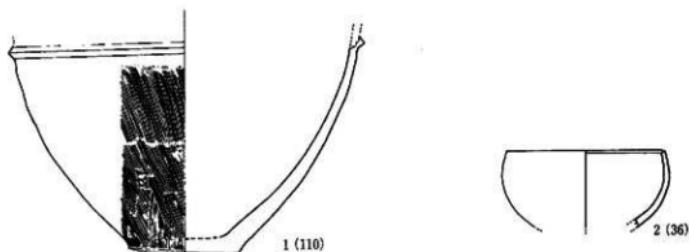


Fig. 22 土壤10出土遺物実測図 (1:4, 1:2)

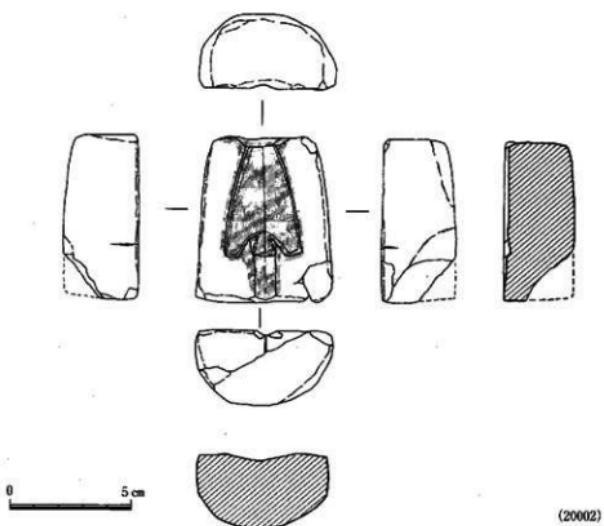
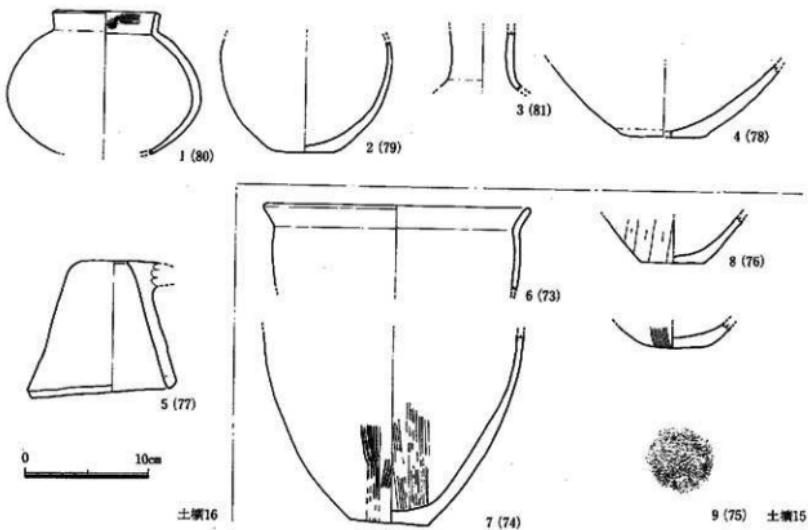


Fig. 23 土壤16出土遺物実測図 (1:4, 1:2)

鋳型が出土している。鋳型は床面からわずかに浮いた位置で出土しているが、他の遺物は出土レベルもまちまちで、やはり投棄した状況を示していると考えられる。

出土遺物 (Fig.23)

まず土器から報告する。1は煙灰壺である。口縁部は短く直立する。端部は坦面をなす。胴部は偏球形である。内外面に丹塗を施している。調整は磨きに近い丁寧なナデであり、いわゆる中期の丹塗土器に見られるミガキとは原体が異なる。また口縁内部にはハケメ様の条線も観察できる。2は小形甕の底部である。底部は平底で、胴部には内溝しつつ立ち上がり、底部との境に明瞭な稜線を持たない。内外面ナデ仕上である。3は小形の長頸甕であろう。頸部付け根のみの遺存である。頸部外面は丹塗を施し、縦方向のミガキをかける。4は壺底部であろう。わずかに凸レンズ状を呈する平底であり、立上りに痕跡的な外反部を持つ。内外面ともナデ仕上である。5は沓形器台である。天井部に穿孔する。器壁は厚く、脚端部は丸く納める。これらの土器から、とくに底部の特徴を見ると、土壙16は土壙10より後出する可能性が高い。

鋳型 出土鋳型は1点である。鋳型は平面台形、縦断面長方形、横断面蒲鉾型を呈する。上端幅4.3cm、下端幅5.5cm、長さ6.8cm、厚さ3cmを測る。鋳型は鐵の片面鋳型である。長さは鋳型面一杯に作られ、闊幅が最大幅で3cmを測り、土壙10出土鋳型B面のものよりやや大きい。かえり、茎付け根の段などの特徴は土壙10鋳型B面のものとよく似ている。合わせ型であり、鋸部断面は菱形を呈する。茎部は稜線が甘く、断面は円形に近いと考えられる。鋸部側が湯口と考えられる。土壙10鋳型に見られたような割付け線は見られない。両側面と、茎側の端部側面に合わせ印がある。鐵1個体のみに作られたという極めて珍しい例である。

土壙15出土土器 (Fig.23)

土壙16に切られる土壙15の土器を、ここで合わせて報告しておく。6、7は色調が類似し、同一個体の可能性があるが、6はかなり小片で断言できない。6は緩やかに屈曲する口縁部を持つ甕である。端部は丸く納める。内外面ナデを施す。7は甕底部である。底部はごくわずかに凸レンズ状を呈する。内外面に目の粗いハケメを施すが、中位以上はナデ消している。8は小形の甕である。平底であるが、外面を削り上げている。9は凸レンズ状を呈する底部で、外底部までハケメを施す。7の底部特徴からすれば、土壙15の方が、土壙10の時期に近いと言えよう。

土壙2 (Fig.24)

住居跡11の西側で検出した。検出面でのプランはやや崩れているが、床面の形状から本来長方形であったと考えられる。長辺1m、短辺70cmほどに復元できよう。検出面からの深さは90cmを測る。床は平坦である。覆土は締まりが無く、長期間のうちに自然埋積した状況と考えられる。これは以下の土壙も同様である。遺物は弥生土器細片が数点出土したのみである。

土壙12 (Fig.24)

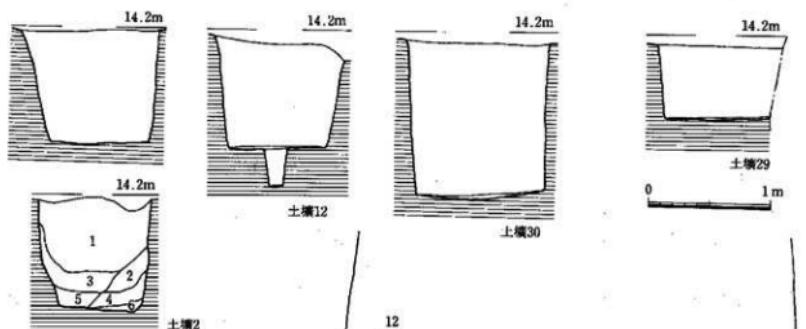
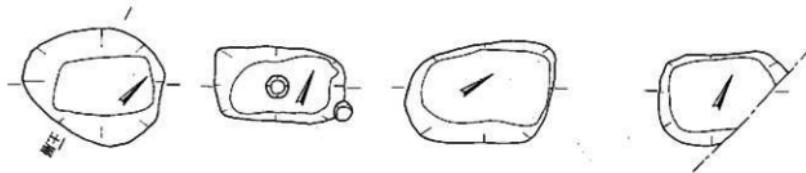
住居跡8の南側に位置する。周囲に擾乱があり、住居跡8との直接の切り合い関係は不明である。長方形を呈する。長辺1m、短辺60cmを測る。検出面からの深さ90cmを測る。床面は平坦で、中央に小穴がある。遺物は土器細片が数点のみである。

土壙28 (Fig.24)

住居跡25の東側に位置し、東側が調査区外に出る。長方形を呈し、長辺1m、短辺70cmを測る。検出面からの深さ60cmを測り、外の土壙よりかなり浅い。出土遺物は無い。

土壙30 (Fig.24)

住居跡11の南側で検出した。長楕円形を呈する。長軸1.1m、短軸80cmを測る。検出面からの深さ120



- ① 黒褐色、粘質、赤茶色の粒状土混入
- ② 1より色調明るい、茶色に近い、堆山の土が少しまじる
- ③ 地山に1が少しまじる、赤茶色のブロック少しまじる
- ④ 色調2と同じ、地山の混入少し
- ⑤ 色調3に似る、ブロックの混入ほとんどなし
- ⑥ 色調5に似る、水分多くべたべた

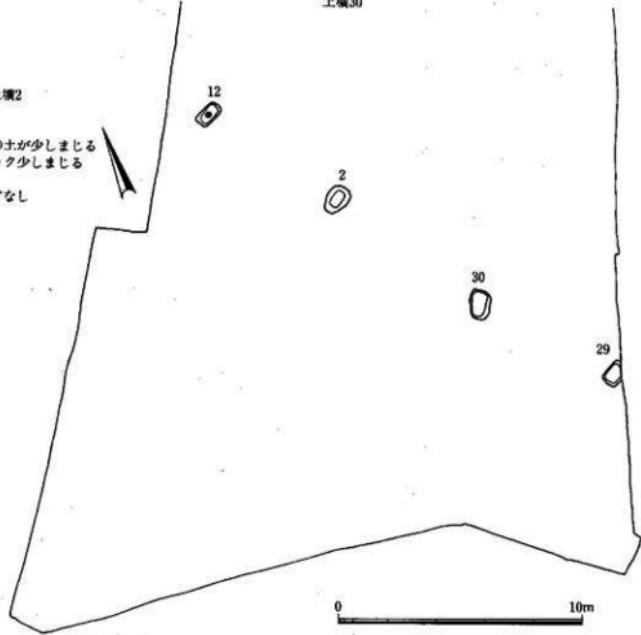


Fig. 24 土壌2、12、29、30実測図 (1:40, 1:200)

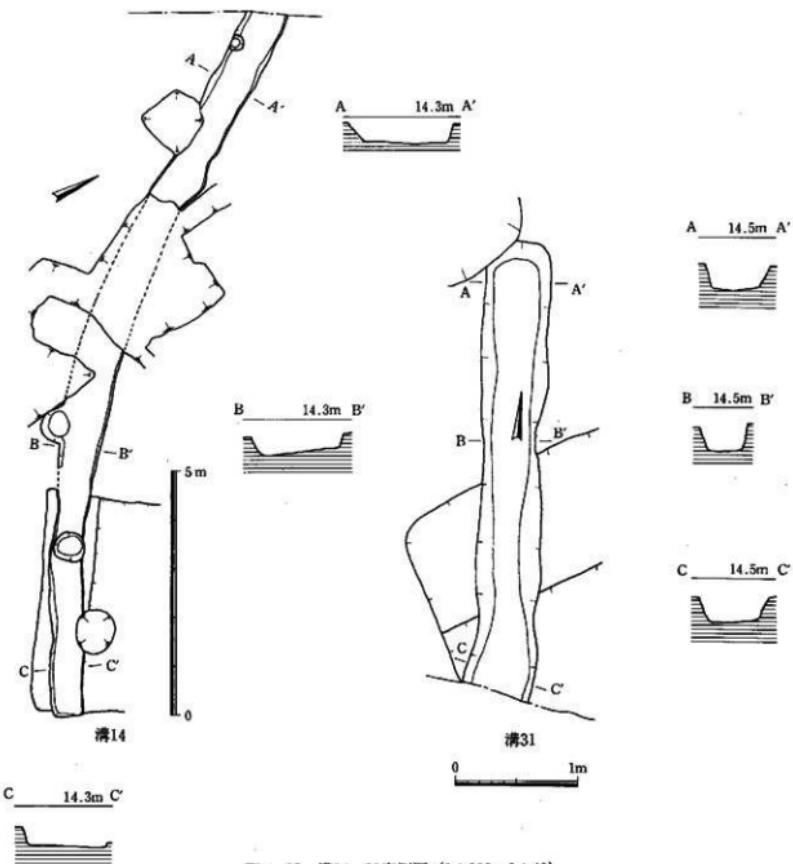


Fig. 25 溝14、31実測図 (1:100, 1:40)

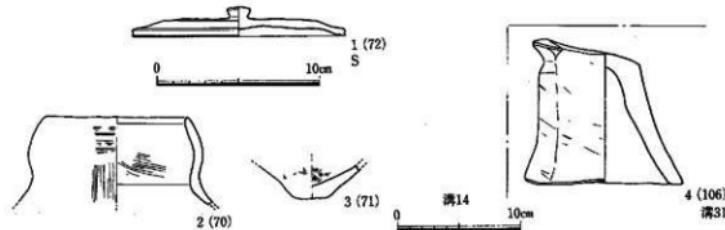


Fig. 26 溝14、31出土土器実測図 (1:3, 1:4)

cmを測る。床面は平坦である。遺物は弥生土器小片が少量出土した。

土壤2、12、29、30の4基はほぼ同形同大の遺構である。また遺物が極端に少ないと共通している。4基の配置を見ると、調査区西辺中央から南東端にかけて、12、2、30、29の順で一列に並んでいる。その間隔は6~7mである。これらの点から4基の土壤は関連した遺構群であることは確実である。その性格であるが、土壤の形態はいわゆる「落とし穴」とされているものに非常に類似している。ただ現在知られている例は縄文時代のものが多い。しかし、今回の調査はもちろん井戸B遺跡の既往の調査を見渡しても、該期の遺構、遺物は見つかっていない。今回調査の土壤群についても、出土遺物は弥生土器と思われる細片のみであるが、弥生時代遺構がほとんどであるから、混入は当然と言え、時期決定の決め手にはならない。切り合いからも、住居8と土壤12が切り合うのみで、先後関係はわからず、時期が異なることが言えるのみである。強いて関連するものを搜せば、西接する2次調査区で検出された旧石器時代の遺物であろうか。ただ、このような遺構は、周辺遺跡で類例が増えつつあるのも確かで、南八幡遺跡、麦野B遺跡などでも検出されている。

(4) 溝

溝は2条検出した。

溝14 (Fig.25)

調査区中央を北西から南東方向へ走る溝である。住居跡11を切り、その南東端付近で終わっている。調査区内での延長17m様を測る。幅は70~80cm程である。壁が比較的立ち、断面台形ないし箱型を呈する。検出面からの深さは20cm程である。

出土遺物 (Fig.26)

1は須恵器の蓋である。端部はほとんど突出しない。つまみも小さく径は1.4cmである。天井部にもヘラ削りはない。2は短壺蓋である。口縁は袋状を呈する。内外面に目の粗いハケメを施す。3は突出する底部である。内面はハケメである。溝14の出土遺物は、図示したもの以外を含めても、最も多いのは弥生土器片であるが、須恵器片が一定量あること、奈良時代の土師器らしい破片を含むこと、住居跡を切ることなどから考えて、1の須恵器が示す奈良時代後期頃に置くのが妥当であろう。

溝31 (Fig.25)

調査区南西隅で検出した。南北方向に走る溝である。住居跡22、23を切る。調査区南辺から延長3.6mを測り、その個所で終わっている。幅は50cm程を測る。壁は比較的直に立ち、断面台形ないし箱型を呈する。検出面からの深さ20cmを測る。やや幅狭であるが、溝14によく似た溝である。

出土遺物 (Fig.26)

4は沓形器台である。器壁が厚く、張出し部を1ヵ所持つ。外面は日の粗い原体による叩きを施す。この他図示していない遺物を含め、出土遺物は弥生土器が最も多い。住居22を切るので、当然と言えば当然であるが、厚手で、内面に削りを持つ甕の破片が数点ある。形状や覆土が溝14に類似していることもあり、溝31も奈良時代に属する可能性が高いと考えられる。

(5) 掘立柱建物

掘立柱建物は調査段階で2棟確認した。その後十分に検討を行っていないので、この2棟について報告する。

掘立柱建物1 (Fig.27)

住居跡8の西側で検出した。2間×4間の掘立柱建物である。梁行4.4m、桁行8mを測る。柱間の距離は2mほどである。柱穴は方形を呈するものが多い。類似した形態、規模のピットと切り合うものが多く、部分的な柱の立て替えが合ったものかも知れない。出土遺物には弥生土器の小片が主で、

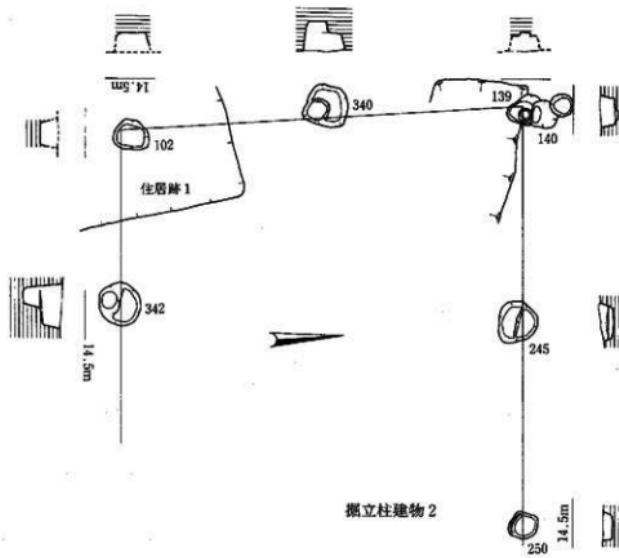
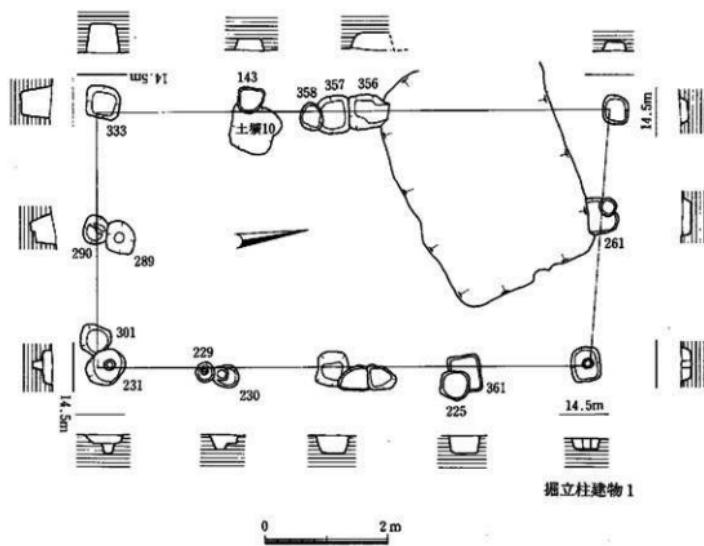


Fig. 27 掘立柱建物実測図 (1 : 80)

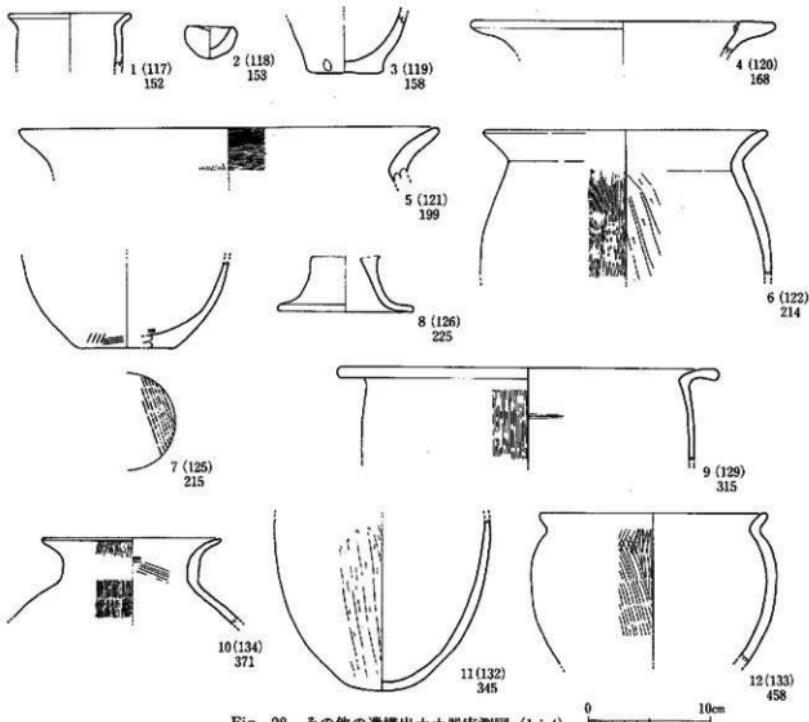


Fig. 28 その他の遺構出土土器実測図 (1 : 4)

図化できるものは無いが、ピット231から土師器坏蓋のつまみと須恵器の細片、261から窓と思われる破片、356から須恵器坏底部等が出土している。また143が土壤10を切るので、弥生時代後期より新しいのは確実であり、奈良時代に属するものと考えておきたい。

掘立柱建物2 (Fig.27)

調査区北東端で検出した。2間×2間以上の掘立柱建物である。確定できる2間分を梁行すると6.4m、桁行6.8m以上を測る。柱間の距離は3.4m程を測る。柱穴は円形を呈する。住居跡1、4を切る。出土遺物は弥生土器の小片が圧倒的に多く時期を明らかにできない。唯一ピット340より須恵器細片が出土している。これをもって奈良時代とするのは困難である。掘立柱建物1とは柱間距離も主軸方向、またピットの形状も異なっている。主軸方向はむしろ住居1、25など古墳時代初頭の住居と一致している。ただ住居1よりは新しいので、住居25併行の時期と考えておきたい。

(B) その他の出土遺物

その他の遺構出土土器 (Fig.28)

Fig.28はすべて他の遺構との関連をなさないピット出土の土器である。Fig.28の枝番号の下段のNo.

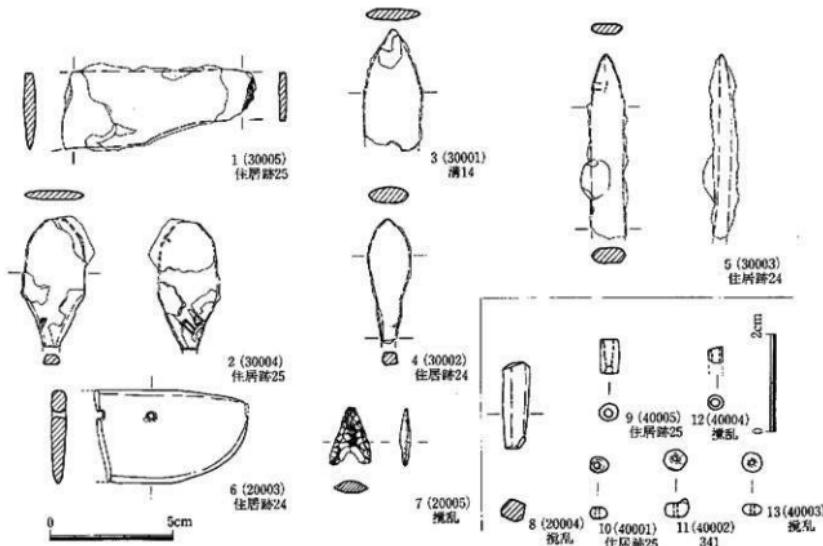


Fig. 29 各遺構出土石、鉄製品、玉類 (1:2, 1:1)

が、遺構番号で、番号順に並べているが、遺構の位置は、持図内の煩雑さを避けるためFig. 5には示していない。もし必要な際は埋蔵文化財センターで原図を参照いただきたい。

1は小形の甕である。口縁が短く屈曲し、端部は丸く納める。内外面ナデ。2は手づくね土器である。3は平底を有する底部である。外面に叩き目らしき痕跡があるが、比較的丁寧にナデ消されてよくわからない。内面もナデ。4は鋤先口縁の甕である。弥生時代中期後半であろう。井戸13併行期のピットの存在は、該期の集落の存在の可能性を補強するものである。調査区内に、削平された円形住居の柱穴等がある可能性も考慮すべきであろう。5は古代に属する甕口縁であろう。厚い口縁部で、内面にハケメを施す。胴部内面は遺存が少なくよくわからないが、削りと考えられる。6も古代の甕と考えられる。器壁が厚く、端部は丸く納める。口縁部はヨコナデ、胴部は外面ハケメ、内面縱方向の削りを施す。7はやや凸レンズ気味になる底部である。外底部までハケメが及ぶ。8は土師器の脚部である。脚端部は丸く納め、内外面回転ナデを施す。ピット225は据立柱建物1をなすピット361を切るピットである。9は弥生土器の甕である。口縁は鋤先状であるが、内面には張り出さず、「く」の字に近くなる。中期後半に属する。10は弥生土器の短頸甕である。短く直立する頸部を持ち、口縁部は屈曲気味に外版する。内外面ハケメである。11は甕底部である。底部は凸レンズの痕跡を残す丸底である。外面は草茎状の工具による削り、内面はナデである。弥生時代終末頃に属する。12は古代の土師器であろう。短く屈曲する口縁を持つ。器壁は厚い。外面は目の粗いハケメ、内面は削りをナデ消しているようである。

各遺構出土石、鉄製品、玉類 (Fig.29)

1は鉄刃の関部である。関幅3cmを測る。2~4は鉄錆である。2は有茎錆である。明瞭な闊を持

ち、外反しながら厚さを増しつつ茎に半る。1、2は住居跡25出土。3は無茎鐵で、かえりを持つ。長5cm以上、幅2.3cmを測る。溝14出土である。4は有茎鐵である。間から上の身部が短く、2に比べて幅も狭い。5は鉢である。先端がやや反る。長7.5cm以上、幅1.5cmを測る。6は右包丁である。幅3.8cm、孔間2.1cmを測る。小豆色を呈する螺旋凝灰岩製の、立岩産石包丁と考えられる。4～6は住居跡24出土。7は撓乱出土の石鐵である。繩文時代と考えられる。8は滑石製の棒状製品である。断面は不整五角形を呈する。用途不明。撓乱出土のため時期も不明である。9～13は玉類である。9、10は住居跡25出土。9は碧玉製の管玉である。半折したものを小口面を研磨しなおしている。鈍い灰緑色を呈する。10はガラス小玉である。鮮やかな青色を呈する。11はピット341出土のガラス小玉。上端に余分なガラスが付着して固まっている。やや鈍い青色である。12、13は撓乱出土。12は10と似た質感である。色もよく似た鮮やかな青色である。13は管玉で、欠損している。器壁が薄いため、透明感のある青色を呈する。

IV. 小 結

井尻B遺跡の集落変遷と竪穴住居の変化

今回調査では弥生時代～古墳時代初頭の集落と、奈良時代の遺構、時期不明ながら繩文時代の可能性もある土壙等を検出した。多くの成果の中から、ここではまず、調査区内の主体を占める弥生時代～古墳時代初頭の集落についてまとめを行いたい。まず最もさかのぼる遺構は中期末の井戸13である。井尻遺跡群内では中期遺構は必ずしも多くない。3次調査で円形住居跡が1基、中期前半の井戸1基、4次調査で中期後半の土壙が知られている程度である。3次調査では円形住居はほとんど削平されており、他の地点でも同様な状況は考慮しなければならないが、後期以降の遺構に混入する中期土器も量は少ない。むしろ中期には後期ほどの大集落は形成されていなかった可能性を考えた方がよいと思われる。1923年に井尻周辺を踏査した中山平次郎によると(註1)、3次調査地点の南西側には甕棺墓が有ったようで、遺跡の中心部は墓域として利用されていたかも知れない。後期になって、調査区内では住居跡を主とした遺構が増加する。井戸13を除くと、最初に現われる土壙10で、これが伴う可能性のある住居跡9、また住居跡26、27などが土壙10に近い時期と考えられる。また土壙15、住居跡6もこの時期の可能性がある。弥生時代後期中頃～後半(下大隈式古～新段階)であり、第1期としよう。第2期は住居跡8、11、22の時期で、住居跡6、24もほぼこの時期と考えられる。また土壙16はこの時期であろう。弥生時代後期後半～終末(下大隈式新段階～西新式)である。第3期は古墳時代初頭(布留式併行期)で、住居跡1、21、25が属し、住居3もこの時期の可能性がある。遺跡群全体としても後期には遺構は激増する印象がある。後期遺構は他には2、3、4次調査で検出され、遺物は1、5次調査を含め各調査区すべて出土している。また、今回出土した銅鏡、銅錫鑄型や、江戸時代に出土している広形銅矛の鋳型の存在から見ても、弥生時代後期に集落の最盛期があり、奴国周辺を巡る有力な拠点集落となったものと考えられる。また後期～古墳時代初頭には、6次調査地点に西接する2次調査地点では、石蓋土壙、土壙墓、低墳丘墓などからなる墓地が検出されている。副葬遺物などはなく時期は不明であるが、ほぼ古墳時代前期以前とされている。集落の存続幅と重なる範囲が大きいと言えよう。2次地点の報告では、墓域と住居域が画されている可能性が指摘されているが、今回調査で埋葬遺構が全く検出されていないことから、その可能性は高いと言えよう(Fig.4参照)。調査区内では古墳時代前期後半(布留式新段階併行期)～古墳時代後期にかけて断絶がある。5世紀には、2次、5次調査地点に井尻B1号墳が築かれ、調査区周辺全域が墓域となり、6次地点で遺構が検出されなくなるのと軌を一にしている。また古墳は単独ではなかった可能性が指摘されてお

り、井尻B1号墳からはなれた1、3、4次地点でも該期の遺構がないことを見ると、広範囲に古墳が造営されていたかも知れない。調査区内では奈良時代の遺構である満14、31の時期まで遺構が見られない。遺跡群全体を見ても、次に遺構の増加が見られるのは7世紀代に入ってからである。

次に調査区内での住居形態の変遷について見ていく。第1期の住居は、完存しているものがないが、ベッド状遺構は住居9、27のように短辺側に設ける例が現われている可能性がある。2期になると長方形2本柱で、ベッド状遺構を両短辺に設ける例が一般化する。また長辺側にも設ける例が現われ(住居24)、3期の過渡的な状況を示す。第3期には方形4本柱の住居が現われ(住居25)、大きな画期をなす。ベッド状遺構は「コ」字状に巡るもの(住居1)、短辺側からL字に長辺側へ折れ曲がるものがある(住居21)。第3期はこの方形4本柱の住居25の出現をもって、古段階と新段階に分けることが適当であろう。従ってプランは長方形から方形、主柱穴については2本から4本、ベッド状遺構は短辺側からL字、「コ」の字への推移が窺われる。また入口と考えられる壁際土壙は、確認できるものはすべて東壁に付く。またベッド状遺構と、壁際土壙の関係であるが、1期、2期には壁際土壙側にはベッドがなく、3期になって、壁際土壙側へ取り付くようになる。

ここで、井尻B遺跡の3次調査地点や、比較的近距離にある周辺遺跡の該期の住居についても概観してみたい。該期の住居については寺井誠氏の論考があるので(註2)、参考にしながら、また、寺井氏があまり触れていない壁際土壙とベッド状遺構の関係にも留意しつつ見ていくことにしたい。まず、井尻B3次地点の、ほぼ住居の形態が明らかな11基を見てみる(註3、Fig.30)。ここでは方形4本柱は検出されていない。6次と同じく3期に分けると、1期の住居はベッドを持たないか、短辺の1/2ほどの長さのベッドをコーナーに設ける。2期には両短辺または片側短辺に付くのが一般化する。3期には両短辺が残るが、壁際土壙を挟んだL字状、「コ」字状が現われる。両調査区を見ると、寺井氏の言うコーナーのベッドから短辺、更に「コ」字状という変遷によく一致する。また壁際土壙との関係で言えば、土壙の両脇ないし片脇に取り付くベッドが出現するのは3期になってからといえる。この点は弥生時代住居と古墳時代住居を分ける上で指標になる可能性があるので、周辺遺跡を概観して見よう。弥生時代の大規模集落といえばやはり那珂、比恵遺跡であるが、ここは大規模すぎて遺構の切り合いが多く、住居形態のわかる例が極めて少ない。那珂遺跡21次調査60号住居跡は第3期に併行するが、方形4本柱で、ベッドは壁際土壙を除いて一周する。また67号も3期で方形4本柱、ベッドは壁際土壙の左脇から3/4周する(註4)。同じく那珂遺跡49次調査2号住居跡は3期に属し、ベッドは両短辺につき、1方のベッドは壁際土壙の反対側にL字に折れる。7号住居は1期に属し、ベッドはコーナーに取り付く(註5)。弥永原遺跡5次調査では1~2期と思われる住居跡3基を検出しているが、1基は短辺、2基は壁際土壙の反対側を巡る「コ」字型である(註6)。駿河遺跡も1~2期の集落であるが、ベッドが壁際土壙側へ巡る例はない(註7)。まだ類例の集成が不足していると思われるが、概ね福岡平野では古墳時代に入って壁際土壙側にベッドが取り付くようになると考えられる。

註1 中山平次郎「井尻の弥生遺跡」考古学雑誌14~12 1924

註2 寺井誠「古墳出現前後の竪穴住居の形態変化」第37回埋蔵文化財研究集会発表要旨集 1995

註3 福岡市教育委員会「井尻B遺跡2」福岡市埋蔵文化財調査報告書411集 1995

註4 福岡市教育委員会「那珂5」福岡市埋蔵文化財調査報告書291集 1992

註5 福岡市教育委員会「那珂16」福岡市埋蔵文化財調査報告書455集 1996

註6 1996年調査、1997年度報告予定

註7 福岡県教育委員会「駿河遺跡」福岡県文化財調査報告書98集 1992

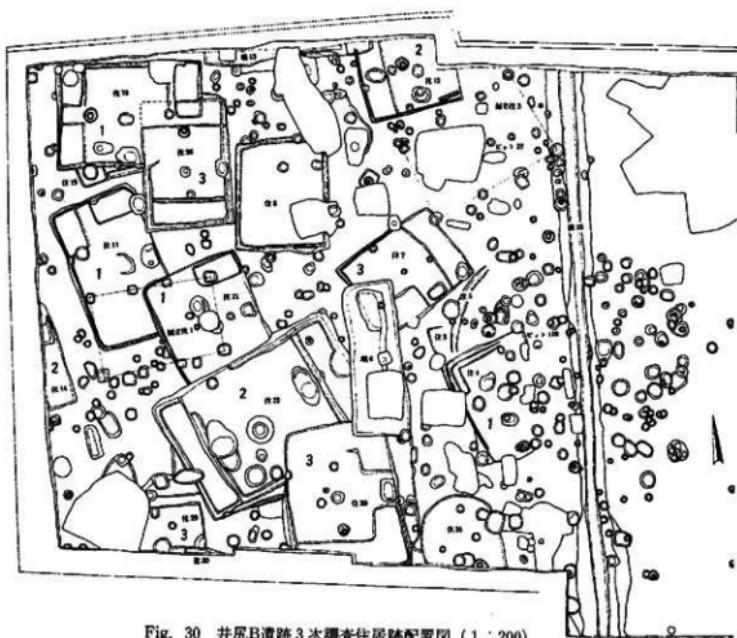


Fig. 30 井尻B遺跡3次調査住居跡配置図（1:200）
(註2 文獻を一部改変 ゴシック数字は1～3期を示す。)

鏡型について

土壇10、16から出土した鏡、鐵鏡型は、鏡としては現在6例知られている。他の5例は須玖坂本遺跡、須玖永田遺跡で2地点2例、飯倉D遺跡、ヒルハタ遺跡である。また鐵としては井尻B遺跡の他に3例知られている。御陵遺跡、須玖坂本遺跡、ヒルハタ遺跡である。飯倉D、ヒルハタを除いて、すべて井尻B遺跡に近接する須玖遺跡群内の出土であるのは重要である。

土壇10出土の鏡鏡型から铸造された鏡は未だ確認されていない。また高倉洋彰氏による分類(註1)にも該当例のない文様を持つ。内行花文の特徴から大きさはII型に分類することができる。II型は後期中頃以降に出土例が集中するので、井尻例は最古段階に位置付けられよう。しかし高倉氏の分類ではI型～II型への形式変化はスムースで、井尻鏡をI型からII型への過渡期型式としたり、II型鏡の祖型と考えたりする必要性はない。むしろ型式組列の主流から外れた異形とするべきであろう。次に文様構成それぞれについて検討して見よう。まず鏡縁部であるが、広い平縁はII式の特徴である。但し、他の仿製鏡の鏡縁が端部に向かって薄くなるのに対し、井尻鏡は厚さを増し、斜縁風になる。櫛齒文帯は特に異なるところはない。花文は浮き彫りで、これはIIa型の特徴である。また花文を櫛齒文帯に直接内接させる。これはIIa型の新段階の特徴とされる。これらの点も井尻鏡をII型鏡の最古型式

としがたい点である。井尻鏡では内区文様が最も特徴的である。他の例に見られる銘文起源、亀竜文起源の文様とは印象が異なる。例えば満文を見ると、銘文の無理解によるもの(例えば雀居鏡 註2)と比べると、明らかに空間を充填する意図をもって施されていると思われる。また花文との関係から、内区文様は四つの単位からなると考えられる。この文様の起源は先述したように方格規矩四神鏡、細線式獸帶鏡等の獸形文が起源ではないかと考えられる。また紐座の内行花文は原鏡やIa型鏡に見られるもので、古い要素の残存と言えよう。

内区文様の起源に、方格規矩四神鏡、細線式獸帶鏡の獸形文を考える立場に立てば、前漢鏡である異体字銘帶鏡の一種内行花文日光鏡を祖型とし、型式変化を辿るとされる小形仿製鏡の中に、それに後出する王莽鏡、または後漢鏡の文様の影響を受けた鏡が存在するということになろう。このような例はない訳ではなく、仿製鏡IIa型に見られるS字文の起源は亀竜文鏡とされている(註3)。この鏡は前漢末に多く鋳造され、後漢に至って日本にもたらされたとされる鏡である。また佐賀県懸座鏡に見られる6乳6S字文には細線式獸帶鏡の影響が考えられている(註4)。更には夜臼、三代地区遺跡群出土鏡には、線刻の長方形文が4ヶ所に配され、方格規矩鏡の影響が考えられる(註5)。そもそも仿製鏡に見られる乳の起源は祖型鏡である内行花文日光鏡にはなく、他の鏡からの影響が考えられているのであり(註6)、井尻鏡の内区文様に方格規矩四神鏡、細線式獸帶鏡の影響を受けた可能性は、十分に考え得る。更にはIa型からIb型への変化である内行花文帯と内区文様帯の逆転にも、雲雷文内行花文鏡の影響が考えられるかも知れない。

以上のような検討から、井尻鏡は仿製鏡I型がIIa型に変化する頃、高倉氏に従えば北部九州での仿製鏡生産が本格化する初現段階に、当時北部九州に流入していた各種の鏡から文様を模倣し、鋳造された異形鏡とすることができよう。鏡縁、備歯文、内行花文はIIa型鏡、内区文様は方格規矩四神鏡、細線式獸帶鏡等の獸形文、紐座はIa型鏡からそれぞれ影響を受けたと考えることができる。ただし、先述したような鏡縁に向かって厚さを増すという特徴から、鏡縁から内行花文帯には雲雷文内行花文鏡の影響を考えた方がよいかも知れない。

註1 高倉洋彰「弥生時代の内行花文鏡」日本金属器出現期の研究 1990

註2 福岡市教育委員会「雀居遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書407集 1995

註3 高倉洋彰「S字状文仿製鏡の成立過程」日本金属器出現期の研究 1990

註4 註3文献

註5 新宮町教育委員会「夜臼、三代地区遺跡群」第3分冊 1994

註6 註3文献

図 版



(1) 出土铸型 1 (20001-B面 20002-表)



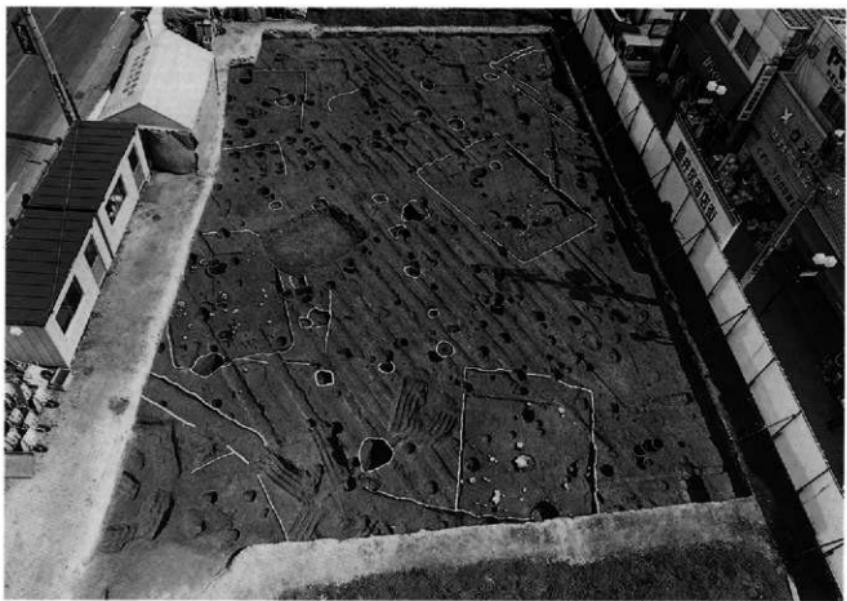
(2) 出土铸型 2 (20001-A面 20002-表)



(1) 調査区北半部全景（南から）



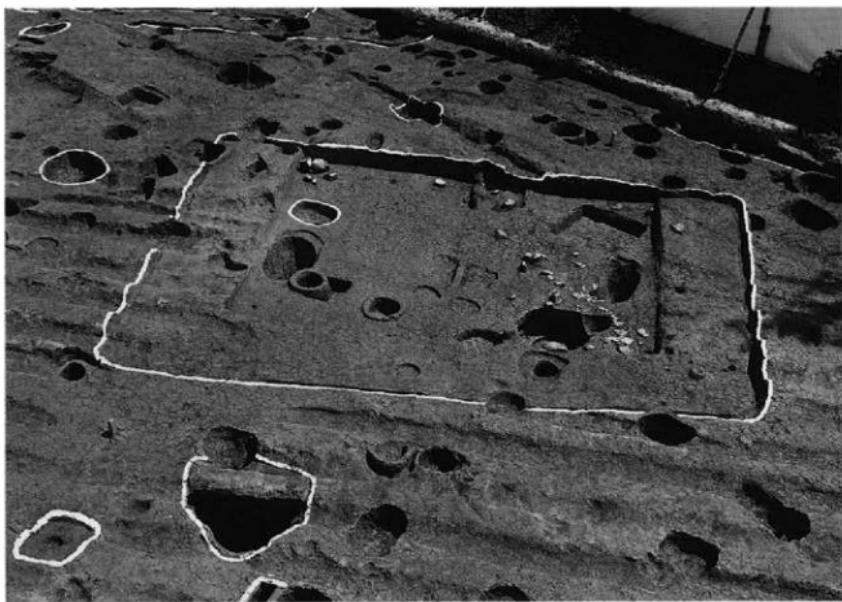
(2) 土壌10（北から）



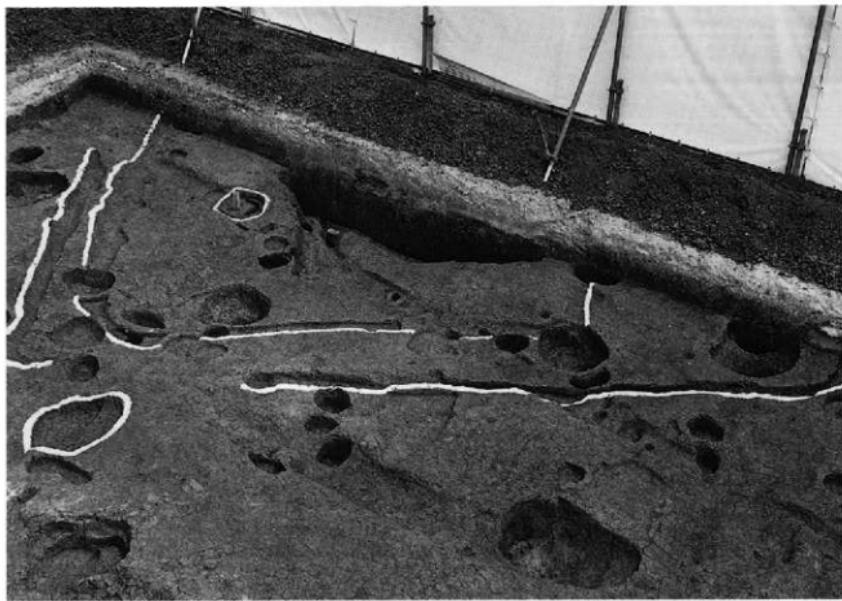
(1) 北半部全景（南から）



(2) 南半部全景（北から）



(1) 住居跡 1 (西から)



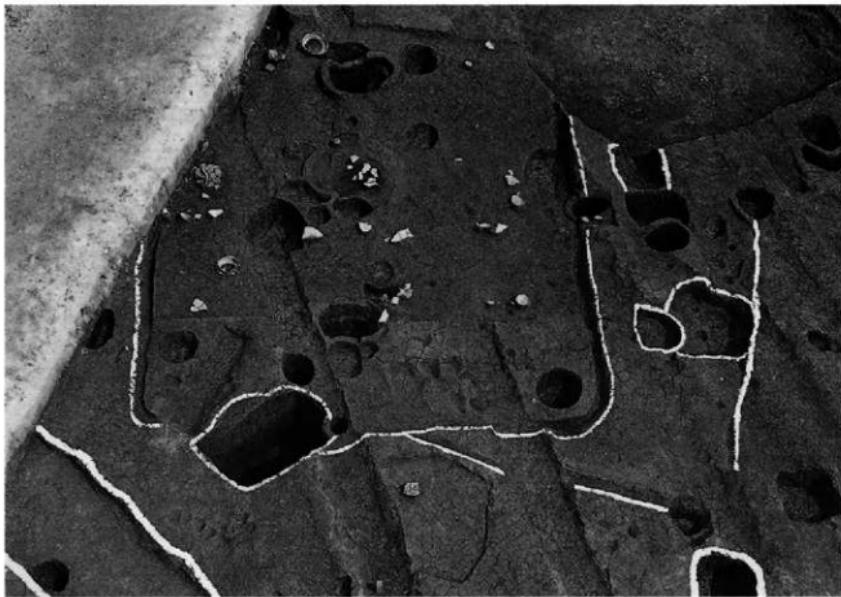
(2) 住居跡 3、4 (西から)



(1) 遺構 5 (南から)



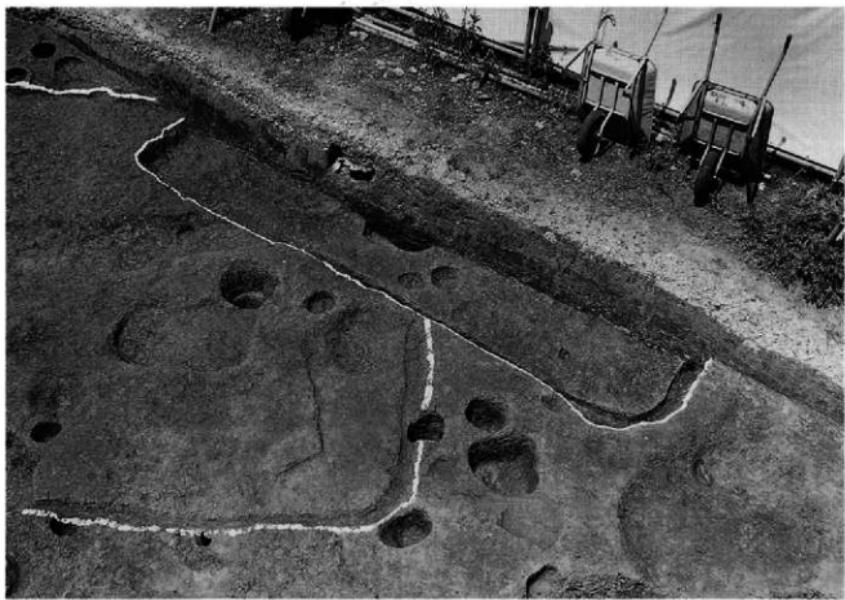
(2) 住居跡 6、7 (南から)



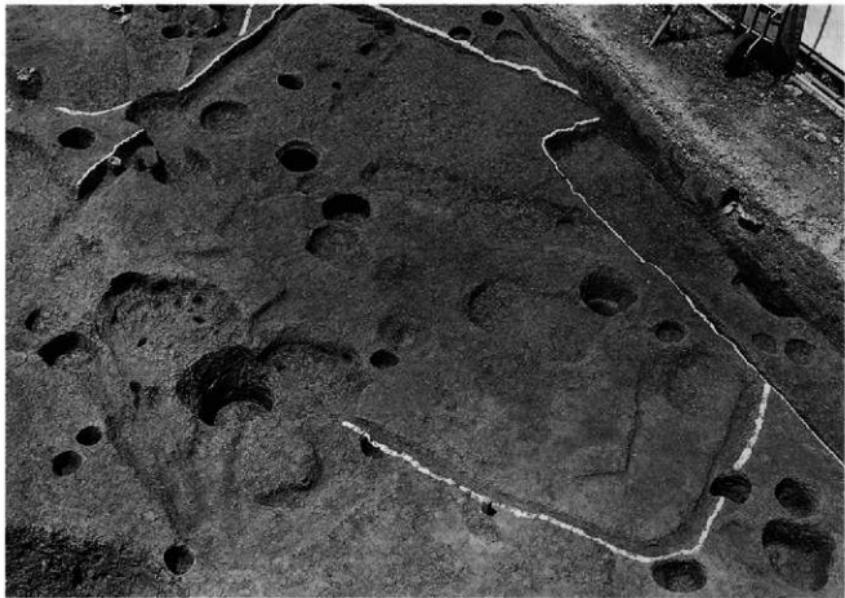
(1) 住居跡8（南から）



(2) 住居跡11（西から）



(1) 住居跡20（東から）



(2) 住居跡21（東から）



(1) 住居跡22、23 溝31（北から）



(2) 住居跡20～23 溝31（北から）



(1) 住居跡24（北から）



(2) 住居跡25~27（北から）



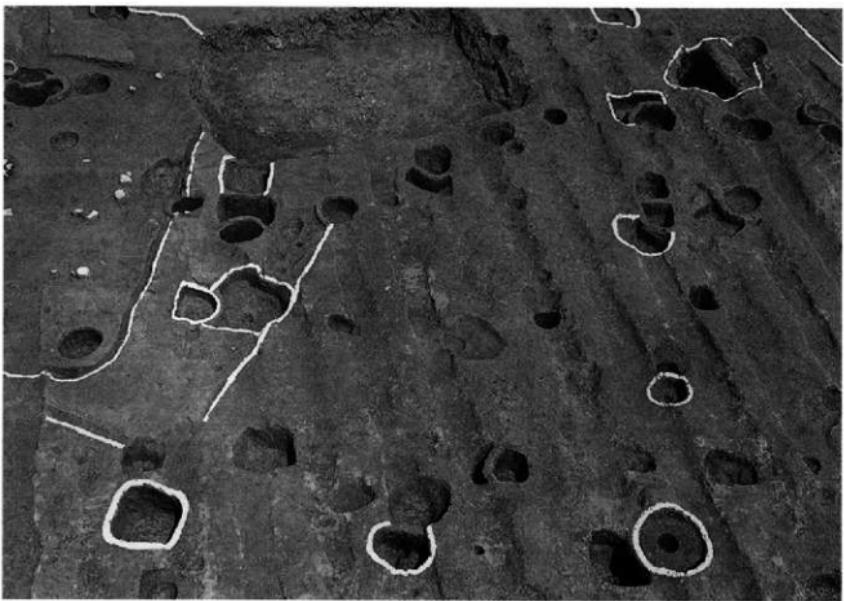
(1) 井戸13（西から）



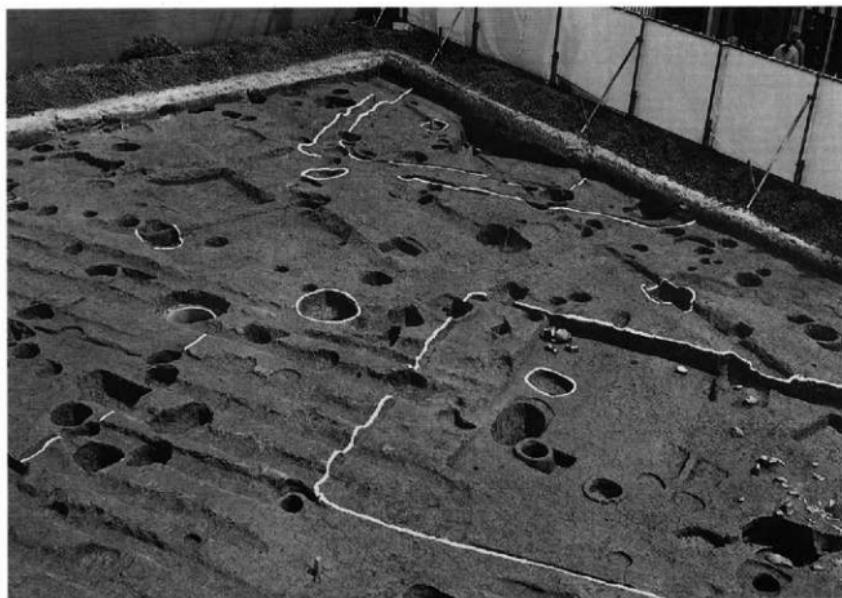
(2) 土壙10窓型出土状況（西から）



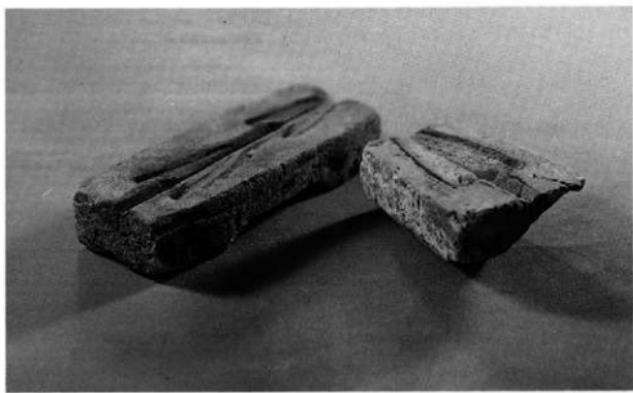
(1) 土壙16（西から）



(2) 挖立柱建物1（南から）



(1) 振立柱建物 2 (西から)



(2) 出土鉄型

井尻B遺跡5

—第6次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第529集

1997年3月31日

発 行 福岡市教育委員会
福岡市中央区大通1-8-1

印 刷 今井印刷株式会社
福岡市中央区赤坂1丁目2番18号

